

雇はねばならぬを見かけ、多分の日雇賃作料等を貪り候。
 と同じやうな事が書いてある。又その外にも、今日の言葉で云へば、懸賞で消
 防をする。危くなつた家でも、焼けないやうにしてくれ、ばいくら出すといふ
 と、随分消し止めてくれる。この弊害も多かつた。戸前などを打つた爲に、あ
 とで金を貰ひに来る。いづれ金のある家だから、相當の村届をしなければなら
 ない。それにも随分弊害がある。又町々の若い者と稱して、普請があるとか、
 店開があるとか、婚禮があるとかいふところへ祝儀を貰ひに行く。御祭の集め
 錢をする。さういふ時に機嫌よく出さないと、必ずあとで仇をする。火事の時
 ばかりには限らない、御祭の時に群集に紛れて店先へ雪崩れ込むとか、神輿を
 振込むとかいふことをやる。彼等は自分の住んでゐるところを定式の持場とし
 てゐるから、地形でも、溝濠ひでも、鳶の者に出来る仕事は、決して餘所の者
 にさせない。若し餘所の者にさせれば必ず苦情を持ち込んで来る。然もさまりき

つた賃銀では、はかどくしく仕事をしない。つまりその町にその火消人足が
 養はれてゐるやうな形になつてしまふ。

鳶の者の資本主

さういふ風で皆出入先を持つて居りまして、それを旦那場といつて居ります。
 ですから今度の普請は地形を誰に頼まうといふ風に、町人が随意に定めること
 は出来ない。必ずその町の人足を使はなければならぬといふ有様である。い
 づれ地面持、家持といふやうな人を出入先にしてゐるのですから、その町でも
 有力な人達で、その出入場の旦那の年頭の御供から、湯治場の御供までする。
 祝儀不祝儀、店先の監督、これはをかした者が入つて來るとか、店先で喧嘩を
 するとかいふ場合に、その始末をするので、甚だ必要なことであつた。こんな
 事も、その町の鳶人足の仕事になつて居りました。これは江戸時代の警察制度

が不備だつたことを物語るものでもありますが、又鳶人足が無ければならぬ筋道にもなつて居つたのであります。中には随分胸氣な人があつて、丁度大名奴、旗本奴といつて、本當の足輕や仲間の眞似を身柄のある人がやつたやうに、勇みとか肌合とかいふことを妙に嬉しがる商家の旦那があつた。それが役者や藝人を最賃するやうな工合に鳶の者を最賃にする。自分が資本主になつて金を遣る。いゝ資本主をつかまへればだんく賣出して頭にもなる、といふやうな有様であつた。何しろ元氣よく遣つてゐるものですから、チミな商賣をしてゐる者の外に、料理屋、娼家などでは必要もありませんので、餘計鳶の者の世話を焼く。さういふ不時な金主がつかまますから、彼等はひどく元氣がいゝ。三百とか五百とかいふ日用では、とてもそんな元氣は出て來ないが、もつと樂な錢が取れるから元氣も出る。氣前を見せるには元手が無ければならない。資本主からそれが得られない者は、別に儲ける手段も無いから博奕でも打つ。併し博奕

は犯罪でありますから、これは自ら別口になります。仕事は氣持のいゝ仕事で、資本主を得て氣前を見せられるだけの錢があるやうになると、益々男振がよくなる。さういふ調子に行くと、どうも鳶の者がよく見えて來ますから、落語に殘つてゐる火事好の若旦那なんていふものが出て來る。半鐘が鳴らなければ寢付が悪い。刺子も別段の好みで拵へさせて、手鳶を腰へさして飛出して行く姿がなか／＼壯快なものであるから、そこだけを眞似る。火事場で泥水をぶつかけてられて、びつくり仰天して逃げ出した、といふ話があるが、實際さういつた人も出て來たのです。

火事は江戸の花

火事があれば大變な被害であります。又火事によつて材木の値段が上り、諸物價が上り、諸職人の手間が上るといふわけで、従つて仕事が多くなるので

すから、細民には非常に都合がいゝ。焼けたところでもとゞ何もありません。焼けて困るのは資力のある者で、無い者の側では火事のあとで勞銀が上るのを喜ぶ位のものだ。火事を江戸の花といったのは、火事場へ駆付ける様子、火事場での働き、すべて大勢で景氣よくやるから、さういふ意味から云つたのですが、實際は花どころぢやない、これ位江戸を疲弊させるものはなかつた、もなつたのでせう。自體江戸の町々のうちで裏店に住んでゐる手合、棒手振、日雇取、駕籠昇、車力、夜商人、諸職の手間取、かういつた資力の無い連中が、その日々を暮して行く。取つただけの勞銀一杯に暮して行くといふのは、渡世し易いからなので、夜が明けさへすれば錢になる。田舎の人達と違つて、少しの錢ではあるがうまい物を食ひ、いゝ著物といふわけには行かないけれど、先づ心持よく暮せる。けれどもさういふ暮し向である爲に、十日も廿日も病氣

で休むか、さうでなくとも雨降風間で仕事に出られないことがある。さういふ状態が長く續けば、その事だけで家族を置去りにして夜逃をするとか何とかいふ、飛んでもないことになつてしまふ話は珍しくない。けれども江戸の人間達は、田舎の人のやうに饑饉が續いて困窮するほどの事は無い。又それが直に泥坊になるかといふと、それほどのも事無い。ひどく困る事は困るものゝ、又取付くことも出来たからであります。

大罪は遠國他國者

それですから棄札でもされるやうな大きな犯罪、首が飛ぶやうな大きな犯罪はしない。さういふ大きな犯罪をする者は、大抵遠國他國の者である。江戸の人間は意氣地が無いのかも知れないが、それほど悪い事はしない。それから又私娼の窠主、ケコロ屋の亭主、船饅頭の親方、夜鷹の牛、さういつたものも

江戸者には出来ない。やはり遠國他國の者でありました。さういふ手合のみならず、御構者で江戸へ出入出来ぬ身分の者が、潜に市中へ入つて来て、男達だとか何とかいつて、悪黨の頭になつたり、博奕宿をやつたりする。女所帯だの藝人の家だのへ行つて、強請をしたり押借をしたりする。これも遠國他國の者に多い。此等は任侠のやうに見えるけれども、實際は世渡り上手なので、自分の身分を隠して居りながら、とつつかまつてひどい目に會はないやうに世の中を渡つてゐる。さういふ如才ない事は江戸の人間には出来ない。明和度の事を『後見草』に、

近頃博奕流行、喧嘩を仕出し、人を切疵付候得者、男伊達の様に云ひなし、博奕致候もの、頭分に成候、

と書いてある。俠客は必ず博奕打であるやうにきめられかけてゐる。俠客が博奕打の筈は無いのだけれども、世間でさう見るやうになつたのです。『我衣』の

文化六年の記事、神田祭の喧嘩の事を書いた末に、

惣て下愚成ものは強きを以て男なりと思ふ、其是非にかゝる事なく彼等が仲間の頭と呼ぶものをみるに、かよふの喧嘩などあれば町内に入用をかけ茶屋にて仲直りの和談のとて莫大の物入をかけ、其拂を茶屋へは遣さず、己が方へ引込、博奕或は酒色に遣ひ捨る、是を催促すればあたをなすゆへ、茶屋も酒屋も穩便にして難澁す、都て彼等は常に絹布などを著し、或は白銀の多く付たる烟草入の大なる杯を提て晴とす、弱きを倒し、強きを恐る、いにしへの男伊達と反する事尤甚し、

と云つてゐる。それでは任侠といふもの、風儀も變つたのかといふと、それは何よりも人物が變つてゐる。又時勢が變つてゐるので、時勢が變つたといふうちに經濟關係が大變に違つてゐる。それをいつも同じやうに思ふのが間違なのです。勿論俠客は一般の風儀ではない、全く別物である。が、その別物であ

るべき任侠の風、俠客らしいところといふものが、一般状態であるところの江戸ツ子の背景になつて、江戸ツ子の姿をいろ／＼に見せてもゐる。そこから又間違が起つてゐるのですが、罪の無い、馬鹿々々しいのがゐる。これは芝居の煽りを食つて、世間の人氣が際立つて来て、それに酔拂つてゐる。鳶の者を最員にしてゐる金持の旦那衆のやうなものが古くからあつたのであります。

大通は笑話の資料

安永度の笑話の中になか／＼面白いのがゐる。金持の子供で二十四五になつても體が弱く、ぶら／＼わづらつてゐるのがありました。醫者が藥喰を勧め、猪の肉を食べさせる。二廻りほど食べると、いゝと云はれたせるか、大變に力づいて元氣よくなつた。もうこれでは大丈夫だと思つて嬉しくなつた。今まではぐ／＼して暮してゐたが、これではいけないから、元氣を出して見ようと

いふので、さういふ手合の常に穿いてゐる日和下駄、そいつを穿いて出かけて見た。きほひ組のやうな様子をして威張つて行くと、近所では金持の息子さんの事だから、どんな事をしても通す。息子殿はそれが面白いから、どん／＼向うへ行く。小田原町から日本橋へかけて歩きながらどら聲を出して、「ヤアよい／＼」と云つて囃して行くと、往來の人は氣違だと思ふから、誰も側へ寄る人が無い。勝に乗つて愈々元氣よく歩いて行つたが、腹が減つて来たので、蕎麥屋へ入つて一二杯食つて出た。ところが蕎麥は猪の肉の敵藥だから、忽ち二廻りの藥喰は効果を失つてしまつた。今度はもう哀れな聲しか出ない。「ヨイヨイ」といひながら歩いて行くと、向うから力んだ男がやつて来て、バタリと突當つた。もう疲れきつてゐるのですから、ぐにや／＼となつて、「モシお前はよく廻り上りました」と云つた。これがオチになつてゐます。二廻りも藥喰をした自分に突當るあなたは一體幾廻り藥喰をなすつたか、といふので落し話にな

つてゐるのであります。まことにタワイも無い話だが、かういふ氣持は慥にあつたのです。

藏前で名高い十八大通の中に大口屋曉雨といふ人がありますが、その晩年、六十を越えてからの話に、外へ出て歸つて來ると、町内で鳶の者が大勢を相手に喧嘩をしてゐる。なか／＼鳶があばれて誰の手にも合はないのを、通りがりの曉雨を見知つてゐる者があつて、何とも始末がつかないといふ話をした。さうすると曉雨は、よし／＼己が押へてやる、と手輕に吞込んで、あばれてゐる鳶の者を押へてしまつた。無造作に鳶の者の手先を取つて捻上げると、造作もなく捻上げられて、痛い／＼と云ひながら倒れる。曉雨は懷から煙管筒を出して、兩手を縛つて町役人に引渡し、この野郎を町外へ連れて行つて追放してやれ、と云つて悠々と立去つた。見てゐた者は皆驚きまして、どうもえらいものだ、老人であつても、さすがに大口屋といふものは大したものだ、誰の手

にも合はない亂暴者をたちどころに押へてしまつた、といつて感心した。それもその筈で、鳶の者があばれ出した、その喧嘩の基といふものは、一分の金を借りたことから起つたのです。そこで曉雨は一分金を五つほど手に握つて、それを持添へて手を捻つたのです。だから鳶の者も自由にされたのだ。腕が強いでもないければ、何がえらいでもない。無駄な金をそこへ打棄つたから、あばれ者を取押へることになつたのです。丁度元氣をつける爲に金持の息子が猪肉を食つたと同じ心持で、馬鹿々々しいこと夥しい。

けれどもこれが十八大通の一人なので、十八大通といふものは十八人の中の十人以上、御藏前の札差どもである。彼等はたゞ金を遣つて騒ぎ立てただけの話であるのに、後の人は江戸の代表者でもあるやうに思つてゐる。任侠でも何でもない。金儲に誇つて贅澤な眞似をしたに過ぎないのです。彼等の幅を利かせるのは芝居町と遊女町で、その時分は歳前本多といつて髪形の形まで違ふし、

著物にも藏前風の好みがあつた。それでは彼等に金があつたのかといふと、さうでもない。利息の高い金を旗本衆に貸付けて、三月縛りで躍りの利を取つた上に、餘所の金を借りてやるといつて、話が出来ると禮金を取るやうな事をした。その金は何處から出たかといへば、團左衛門の金を利安で使つたので、つまり悪儲けの金をむやみに使つたわけなのです。それですから曉雨の二代目の伊勢屋宗四郎、これが三升屋二三治の親父ですが、芝居でする助六のやうななりをして、芝居町や廓で金を遣つた上に、廓で喧嘩をして山口重藏といふ者を斬つた。斬りどころが悪くつて、その人が死んだものですから、據なく家出をして生涯自分の身體を隠した、といふ經歷の男であります。それも亦任侠な男のやうに傳へられてゐるけれども、自分と同じ遊女を買つてゐた相手の重藏に喧嘩を賣つたので、任侠でも何でも無い話だ。

明和八年の謎を見ますと、

藏前者神田ものとかけて犬がりとき、意はこゝもキャン、かしこもキャン、

といふのがある。『キャン』といふのは俠の字を書くのですが、ちつとも俠らしところは無。此等は皆旦那衆の御道樂で、江戸ツ子がるやつなのです。『俠』といふ言葉に就ては、『本町文醉』に、

廻大根 畠一

切店地廻掛ニ裏襟。三升手拭鼻嘔吟。傳聞五十鹽花客。俠者不持宵越金。といふ狂詩があります。『大根畠』といふのは、當時切店と稱した、ごく安い私娼の居つたところ、そこへ出入りするやうな人間に對して『俠』と云つてゐる。俠は宵越の金を持たぬといふ。持たないんぢやない、錢が餘計無い人間なのです。から、皆その日に遣つてしまつてまだ足りない位のものだ。宵越の錢などがあらう筈は無。さういふ者が『俠』なのです。財布の底に錢が無いのは、綺麗さ

つぱりしてゐていゝ。そこを又『流れ川で尻を洗つたやうだ』なんて云つて褒める。さういふ褒め方をするから、江戸ツ子といふものが何だか大變いゝものゝやうになつて來ます。

奉公人聯盟の張本

坂東武士の血を引いた江戸ツ子だけに、幕府以來の武士の移りといふ方がはつきり云へません。とはいふものゝ江戸ツ子といはれる者は、下らない者の方が多いのであつて、そんなに大袈裟な事を云へるほどの代物ではない。たゞ彼等を引立て見せるやうな背景があつたから、それで何分かえらさうにも見えるといつたものである。その背景といふのは彼等とは別なものなので、熊さん八さんの畠ではない。それは何かといへば、かぶき者、町奴、きほひ組、通り者大通、この大通が又分れて行つて通人となり、通となつてゐる。それから勇み

勇みになれば江戸ツ子の一般の姿といつていゝでせう。別なものとも思はれない。が、それより前に擧げた五つのもものは、特殊な事情で生れた特殊な人間なのであつて、押ならした江戸の住民とは云はれないものであります。

時代からいつて一番古いものは『かぶき者』ですが、かぶき者の中で最も名高く、又その標本ともいひたいものは大鳥一平であります。この一平は武藏の國大鳥の生れで、筋骨逞しい、作り損ねた二王様のやうな男でありましたが、別に氏も素性もあつた男ではない。立派な骨柄に生れついた爲に、鋤鍬を持つて暮してしまふのが厭で、武家奉公を致しまして、本多百助といふ旗本衆の徒士になり、後には大久保石見守の目付である大久保信濃の中小姓になり、武家の奉公人の内情をよく知つて居りました。さうしてさんく渡り奉公をして、遠國他國をも經めぐつた後に江戸へ出て參りまして、それから武士にもならず、町人にもならないで、男を立てることになつた。彼のやつたことは武家奉

公人聯盟とでもいひますか。この節の言葉で申せば社會運動とでも云はれるものなのでせう。武家奉公人聯盟の張本になりすまして、頼まれゝば命の用にも立つ。その頼まれ甲斐のあるところを頼もしがつて、若い連中から推立てられて来る。大風嵐之介、大橋摺右衛門、天狗魔右衛門、風吹散右衛門などといふ變名のある、腕ッ節の強い者を仲間を持ちまして、團結して武家の奉公人に聲援を與へ、抱主の亂暴を抑制しようとした。どうして又さういふ者が出て来るやうになつたかといひますと、一平も長い間武家奉公をして苦しんで參りました、よく事情を知つて居るのですが、當時の諸大名、諸旗本といふうちにも、三河からついて來た譜代の人達は、旦那が天下を取つたといふ威勢に誇つてゐる。殊に今までは違つて、大名とか旗本とかいふ分限を得て、急に身幅が廣くなつても居ります。概して戰國氣分が抜けてゐないのですから、人扱ひの荒いのは尤もの事でありますが、とりわけて妙な力みを持つてゐるだけに、三河

以來の譜代の人達は人とも思つてゐない。それが又俄大名、俄旗本といふので、威張る方に輪をかけてゐる。この大威張の俄大名、俄旗本といふものは、俄といふ字でわかる通り、急に取立てられた人達でありますから、その分限に相應した人數を持つてゐる者が無い。急拵へに家來を拵へなければならぬ。幸に戰國の後で、失業武士、扶持離れの人間が澤山居りましたから、武家は奉公人に困るやうなこともなく、盛に供給されたわけでありましたが、この新參の徒士、若黨といったやうなものは、昨日今日の主従だけに、旦那に對して何の親しみも無ければ情愛も無い。抱へる方でも索性も何もわからぬのですから油斷は出來ない。寛かにして置けばつけ上つて來て、とても使ひきれないから、思ひきつて押へて、厳しく使つて行くより外に、さし當つて仕方がない。恩威並び行はれるといふわけには行かない。どうしても威ばかりになりますから、主従の情誼が無くなつてしまふ。この頃の武家の主従は働ける

限り働かせるといふ事と、きまつた勤めだけしか勤めまいといふ事との對抗で
 ありまして、かういふ對抗がある爲に、主命に違ふからといふので手討になる
 奉公人が夥しくあつた。武士の世界では、假令主人の方が無理でも、一度命
 令されてそれに背けば、殺されても仕方が無い。かういふ新しい主従關係が
 出来て来たのは、給金が欲しいからばかりではありません。無論従前主取をし
 てゐた時の分限に比べれば、悪くなつてゐる方が多い。割のいゝ主取をしたわ
 けではないけれども、主取をしなければ武士でなくなる。浪人者だ。彼等は武
 士といふ分限を失ふことが甚だ悲しかつたのです。この頃の武家の奉公人は、
 武士でなくなるのが厭だといふのと、腹が減つては困るといふのと、この二つ
 の譯柄から、割の悪い主取でも是非しなければならなかつた。酷薄な、親しみ
 の無い主人に苦しめられ、虐げられても、ちつと辛抱してゐるのは、餓死する
 よりも士でなくなるのが辛かつたのであります。

大鳥一平組の活躍

この呼吸をよく呑込んでゐる一平は、民間から頭を擡げて武家階級へ入つて
 行つた男だけに、兩刀に對する執著も空腹の難儀もよく知つて居つて、そこか
 ら離れられぬ弱みのある、當時の武家奉公人を氣の毒に思つた。主人の側の無
 法なことも無論知つてゐるのですから、主人の方を少ししたしなめてやらう、と
 いふ氣持から起つて来たのであります。當時江戸には大鳥一平組と稱する、武
 家奉公人の聯盟があつた。さういふものが出来て景氣がいととなると、その威
 勢のいゝところに惚れて、若い元氣のいゝ旗本衆の子供や、御家人などの若手
 がこれに加はつて、氣勢を添へるといふやうな事も出来て来る。
 旗下の士に北河權兵衛といふ人がありまして、或時自分の使つてゐる若黨
 を一人手討に致しました。その時側にゐたのが石井猪助といふ者で、これが直

に北河に斬つてかゝつて殺してしまつた。北河の家來が猪助を取押へて、どうして自分の主人を斬つたかといつて吟味すると、私は別に北河に對して遺恨があるわけではない。けれども御手討になつた若黨はかねてからの友達で、何ぞの時には互に命の用にも立たうといふ約束がしてある、それを御殺しになつたのだから、私としては見てゐることは出来ない、殺された若黨からいへば、北河は主人だから手向ひは出来ないだらうが、自分は主従ぢやない、だから友達の敵を討つたので、別に差支は無、と云つて力み返つてゐる。北河の家來どもは、平生さういふ申合をして置いて、武家の奉公人が聯絡を取つてゐる、さうして主人が家來を成敗したのに敵討呼はりをするのでは大變だ、かういふいたづら者は後日の爲であるから火焙にしろとか、生埋にした方がいゝ、とか云つて騒ぎ立てた。さうすると石井が云ふには、士と士が云合せて、一命を捨てるほどの義理立をするのはいたづら者ではない、間違へられては困る、こ

れが武士の意地なので、これほどの心がけのある者は、私どもの仲間にくらもある、又これほどの心がけも無い者は、士でも何でもない、大鳥一平と盃を取交した者は、江戸中に澤山居るが、それらは皆自分と同じ義理立をするものである、といふので威張つてゐた話がある。この北河が殺されたのは何時の事であるかわかりませんが、柴山孫作といふ旗本が家來を成敗して、大鳥組から殺されたのは慶長十七年六月二十七日で、殆ど同じやうな事件でありますから、北河の一件も多分その頃の事であらうと思はれます。そこで幕府は捨て置けないといふので、大鳥一平組をだんく吟味しまして、遂にその頭領である一平を捕へて殺してしまつた。それから後といふものは、諸大名、諸旗本ともに、新參者の取扱を大分變へて穩かにしたさうでありますから、一平は刑罰の爲に死んだけれども、彼は必ず得意なわけであつたらうと思ふ。百姓から出た一平が、當時の社會問題といふやうなものに幾分の緩和

を興へた。さうして武家奉公人どもを一息つかせてやつたといふことは、たゞ自分がえらい、強いといふ事に誇るだけの所謂侠客なるものに比べて、一平のやつた仕事は何分の値打があると思はれる。けれども又この仕事は、幅が武家屋敷に限られたもので、民間への影響が割合に少いから、後世には忘れられがちなものになります。

高割人足の請負業

それに次いで起つたのが町奴で、この方では幡隨長兵衛などが代表者といつていゝものでせう。長兵衛は一平と似通つた経歴の男で、浪人者の子でありましたが、花房大膳といふ旗本の徒士になつてゐたこともあります。大鳥一平が死んでから三十幾年を隔てた慶安三年四月十三日に、水野十郎左衛門の爲に長兵衛は殺されました。水野と喧嘩をする時分には、長兵衛はもう武家の奉公人

ではありません。武家奉公人の口入をしてゐる山脇惣右衛門の娘を妻にしまして、その關係から舅の商賣と同じ商賣をして居りました。それは割元といつて武家の人足請負をする職業であります。徒士や若黨のやうに兩刀を帯びてゐない、たゞの人夫を扱ふのです。商賣柄として長兵衛は武家と民衆との間に立つてゐるので、大鳥が浮浪の身分で武家の主従の間に割込んで行つた筋道とは違つて、それよりはよほど穩かなものであります。そこで割元といふのはどんな職業かといふと、幕府の無役の家來を小普請と云ひます。小普請入を命せられると、今日なら休職か非職と同じ事で、現職といふものが無くなる。然も小普請には際限が無いので、當人一代だけでなしに、子孫までも小普請でゐなければならぬことがある。その無役非職の武士に背負はせる義務がありまして、幕府の土木工事に高割で人夫を出させる。百石以下の者はこの義務を免除されますが、百石以上の者は工事があつた度に、小普請奉行から命じて高割の人夫を

出させる。百石毎に二人乃至三人、五百石となると高割人夫の外に、杖突といふものを一人つけて出させる。並の人夫は中間でいゝが、杖突は士格の者でなければならぬ。けれども旗本等は戦國の仕事のやうに、軍役として定められただけの人數を持つて居りませんから、高割に對して人夫が出せない。慶安度になつてはそれに困るところから、請負にさせるやうになつた。さうなるこの小普請の高割人夫の請負といふ商賣が成立つので、割元といふのは小普請の高割人夫の請負業の事なのであります。

小普請奉行が石高に從つて家々へ人夫を割當てる。その命令を皆旗本等が受取るのですが、それを割元が引受けて、さうして自分の手許に寄子といつて若い者を澤山持つてゐる。それに割合せて差出すので、その請負料は百石に就て二朱、二百石に就て一分位だつたといひます。高割人夫に對しては幕府から定扶持として、一人に現米二合五勺づゝを日給します。これは晝扶持で、それを

受取るだけです。から、その他の食料、賃銀は旗本から割元の方へ取る。この外にまだ請負賃も取れるので、請負賃といふものは割合に高いやうに見えるけれども、百石に對して高割の人夫といふものは、一年に二三人出す位のもので、それが爲に正直に自分の家來として、餘分に人を抱へて置くことを考へると、請負賃が少々高くても、割元に頼んだ方が都合がいゝし、人も揃ふ。割元の方からいへば、旗本等は自分の家來を出すべき筈のところを、請負つて自分の手の寄子を差向ける。割元の手に入る寄子でありますけれども、それを幕府の工事に差出すとなると、何の誰それといふ旗本の家來のわけを出す。武家奉公人の扱になつてゐるのですから、若し不調な事があつたとすると、幕府は割元を處分せずに、名義人の旗本を處分する。又さういふ事があつた時は、割元は旗本等に對して責任を持たなければならぬ。それですから旗本等も割元を信用しなければ、なかゝ請負はせるわけには行かない。安心して自

分の家來の顔をして出して置ける人夫を、割元はきつと持つてゐなければなら
ないのだから、旗本に對して十分信用を得るだけの者でなければならぬと共
に、どんな人間が入つてゐるかかわからない自分の手許の人夫ども、それらに決
して間違を仕出來させぬだけの壓力を持つてゐなければならぬ。さういふ意
味合でありますから、たゞの請負とは違つて、信用の代金が請負賃の中に含ま
れてゐるので、なか／＼安いわけには行かない。大鳥が率ゐてゐた武家の奉公
人は、現在も過去も武家の奉公人でありましたが、長兵衛の手許に寄つてゐる
寄子といふやつは、種々雑多な人間でありまして、その多くは民間で成育した
者どもである。かういふ者を集めて恩威並び行はれるには、人情に厚く義理を
重んじ、腹もある男でなければ、大勢の人間が心服して行くわけには行かない、
旗本の方からも寄子の方からも信用される人間でなければならぬし、又それ
を手際よく引廻して行く手腕もなければならぬ。つまり割元といふものは、

男達の資格を持つてゐなければならぬかつた、といふことになるでせう。

それが寛文度になりますと、小普請の人達の義務は人夫で差出すのではなく
金納といふことになりました、百石に就て小普請金一兩といふことに定められ
ましたから、割元業といふものもなくなつてしまつた。江戸に割元業のあつた
のは、慶安から寛文まで、凡そ三十年ほどの間でありました。従つて割元業を致
して居りましたものは、長兵衛一人ではない。まだその外にもあつたのですけ
れども、彼は自分の手に持つてゐた、寄子の數も多く、出入先も多く、従つて
取扱ふ金も多かつた。それが又俠名を高くするわけでもありません。長兵
衛が割元者業であつたといふ事は却つて傳はらないで、その人の職業でない町
奴といふ任俠の柄行の方が知られてゐる。當時旗本奴といへば、身分もありま
すし旁々で、取扱ひにくいあばれ武士でありました。戦國の餘習を脱しきれな
い時でもあり、親譲りの武勇を持つた爲もあり、經濟上の壓迫もあり、旁々

時勢に不平でありましたから、飛んでもない代物が出来上つてしまつた。その困り者の旗本奴に對して、その風儀が羨ましいから起つた町奴、それが互に衝突する。長兵衛の義侠が世間にいつまでも忘れられないのは、水野に殺されたからであります。長兵衛の事蹟といふものは一向慥な事が知られてゐない。彼が殺されたわけもどういふ事だつたか知れてゐないので、わけはちつともわからないが、長兵衛は正當なもの、義侠なもの呑込ませてゐる。相手の旗本奴が亂暴な困り者であつた爲に、後々の人までさうおぼえ込ませてしまつたのです。實を云へばその喧嘩は水野がいゝのだから、長兵衛が悪いのだから、慥にわかつてゐるわけではないけれども、武士と町人と喧嘩をしたといへば、一方に權勢があるだけに、町人の方がえらいやうに見える。權勢に刃向つて負けなかつた、といふところを買ふ氣になる。百姓が領主と争つて殺される。その理由は何であつても、義民だといつて感心されるのと同じ事だと思ひます。

きほひ組の勃興

その後起つて來たのがきほひ組、このきほひ組といふのは幕府の小普請方で使つてゐる鳶の者、幕府常傭の人夫と、民間の請負師の手に在る人夫とのかたまりです。元祿の末に知られた神田の竿竹十兵衛、白山傳兵衛なんていふのが、きほひ組の御先祖様と云はれてゐる。この兩人は小普請方の鳶の者の頭であります。もう元祿の末には高割人夫の出ることは無くなつてゐますし、割元といふものも無くなつて大分久しいのですが、幕府が常に使つてゐる人夫、小普請方の鳶の者、手子の者なんていふものはずつと古くからあるので、割元が高割人夫を請負つてゐる時分にもあつたのであります。けれども同じ人夫でも幕府が直に傭つてゐる常傭人夫であるだけに、この方が幅を利かして居つた。町方へ出てどうもこの方が羽振がいゝ。が、小普請方で常傭の人夫といふも

のは数が少い。その時分としては無論高割人夫に出る、割元の手に入る寄子の方が数が多いし、それを率ゐてゐる割元が人氣のある男でありましたから、割元のある間はそれに頭が上らなかつた。それがなくなつて稍久しくたつてから、やうく小普請方の常備人夫が威張り出したのです。徂徠は例の『政談』の中に『浅草の御藏前、又小田原町に、きほひ組と號するものあり、黨を組みあはるゝものなり』といふ事が書いてある。御藏前といふのは幕府の米藏のあるところで、それに使はれてゐる常備の小揚人足、小田原町といふのは魚市場の若い手合でせう。それらの者が小普請方の人夫と一緒になつて、江戸中をあばれ歩くわけで、これは義侠でも何でもありません。さうして又統率者が無いのですから、話にもならないやうなものである。ちよつと見ましただけでも白猿の書いた『老の樂』の中に、享保十九年六月頃、夕景から澤村訥子が商見世を出してゐるところへ、きほひ組があはれ込んで、掛矢で店を壊したりしたの

で、堺町が大騒だつたといふ事があるし、『元文世説雜錄』にも、元文三年三月十四日に新吉原新町河岸の山田屋といふ女郎屋へ、下谷金杉のきほひ組が何か意趣があるといふので押込んで、大變狼藉を働いたといふことが書いてある。前にも云つた藤掛式部の屋敷で亂暴した、あの主動者はきほひ組だと書いてあるものもある。かういふきほひ組のあはれた話は、搜したらよつほど数の多いことだらうと思ひます。併しきほひ組にさんぐあはれられて、屋敷まで壊された藤掛式部は、幕府の方の首尾も悪く、御役御免になるほどでありましたが、一方では又御禮も云はれてゐる。きほひ組の中には追落しをやつたり、巾著切をやつたりした者があるのを、藤掛は厳しく僉議して、一々つかまへて處分をしてくれた。きほひ組が抑へつけられて世の中が静になつた。それは藤掛の御蔭だといはれて居ります。

男達は不評判なもの

男達といふものはいろ／＼の名前で呼ばれてゐて、時々風儀で様子も變つて居りますけれども、いづれにしても男達なんていふものは、あまり評判のいゝものぢやない。あとから想像して、氣持がいゝなんていふ事を云ふが、實際その者に向つて見れば、どうしてそんなものぢやない。延寶八年十二月の町觸に、町中で男達をする若い者は、方々で理不盡な事を申掛けるよしであるが、左様な徒者は見聞次第に町奉行所へ訴へ出る、と書いてある。これには明かに『男達』とあつて、きほひと町奴の區別が無い。いゝのも悪いのもごつちやにして民間でも男達といひ、法令でも一緒にして片付けてゐる。この理不盡な、然も下品な男達といふ中に入つてゐるきほひ組の特色として『下手談義聽聞集』の中に、

男作などいふ馬鹿らしき事は今はなし、たゞこつばぎほひといふ者が澤山にて、むづかしくなると逃げてあり、命おしみと笑ふものもなければ濟んでゆく、

と書いてある。これは寶曆度のものでありますが、『こつばぎほひ』といふ言葉はなかく面白。少し達引が面倒になれば逃げて行く、つまり命が惜しいのだ、といつて、その空元氣を指摘して居ります。同じ頃に出來た『教訓雜長持』には、

きほひの精靈じやとて、棚經に惡對もよまれまい、といふ皮肉が書いてある。死んでから魂祭をする時に、きほひ組だからといつて御經の代りに惡對をいつて置くといふ供養もあるまい、といふのです。盛に惡對を云ひ、痰火を切るなんていふことの行はれるのは、きほひ組の特長の續きだとも思はれる。きほひ組の惡對のひどかつたことは、上方まで知れてゐた

男達は不評判なもの

と見えまして、寛政五年大坂版の『誹諧世吉の物競』にも、

男達といへば大坂をおもひ、競組と呼ぶは江戸に止まる、出入と唱へて静に事をわかち、達引と嘗つて、かさ高に理を推す、俠者も其風に寄る歟、といふことが書いてある。きほひ組の達引は文句が多い。ほんく云ふ。それが痰火を切る風を助長したので、ほんく云ふから鐵炮といふ。むやみに音がするだけだから、謔の事を鐵炮といふやうにもなつた。これはきほひ組の特長でありました。

このきほひ組から分化したものに、『通り者』と『大通』とがある。寶曆以後の江戸に目立つたものは、この二つであります。きほひ組といふものは、もう亡びてしまつて、たゞその風俗が『下駄組』といはれて、明和安永の世界に及んでゐる。それから轉化しては、江戸ツ子の或風采が『きほひ』といはれるやうになりました。同じ言葉でも時々によつて意味が違ふ。それも場所が違ふのではなく、同じ場所の江戸で然も著しい變遷があります。

じ場所の江戸で然も著しい變遷があります。

粹と通り者

粹といへば上方言葉、通り者といへば江戸言葉だと思つてゐる。それに就ては『洞房語園』に収録した『待乳問答』といふものがありますから、その文を出して置きませう。

予又問ふ、京に粹といひ、關東に通り者といふ。貴翁の知り給ひし通り者の中に、當時若い者の定木とも成るべきは、何れか其人ならんと、翁の曰く、足下を始め、世人皆放埒成る博奕の徒をさして通りものといふ。然らず、爰に大言せば、天下の事に於て通せざる所なきを聖といふ。世俗の人に於いても、諸事に事馴れて、能く捌けたる者を、關東にて通り者といふかの通せざる所なしといふ通の字を借り用ゐたるもの也。京にて粹といふ

事は、六藝及び諸事に渡りて、其道々に達して、精しき者を粹といふ。精と粹と字音相通ず、文筆に精しき者は文筆の粹也、音楽に精しき者は音楽の粹也、然るを京童、浮れ女などは、一偏に好色の方へのみ引つけて、婆娑羅風流を好む族を粹といふ。それも片押には咎むべからず、好色には好色の粹もあらむ歟、畢竟じていふ時は、生得の利發なるは、何れの道へ押かけても、粹の中間へ入り易し、生得の愚鈍なるは、何れの道にも通じ難し、前に足下の問ひ給ふ任侠の中において、當時若い者共の手本となるべき人物、愚老は未だ其人を見ず。

けれどもこの『待乳問答』といふものが、既に語意が曲つて來てゐる。ですから『下手談義』に『通者、江戸にて博奕するもの、別號也』ときつぱり云つてあるのが、却つて明白でいゝと思ひます。上方の方のものでは『通者』といふ言葉をどういふ風に使つてゐるかと思つて搜して見ると、随分澤山あるやうですが、

大概氣の利いたといふ方の意味に使つてゐる。任侠といふ方の意味に使つてゐるのは、『棠大門屋敷』に、

此亭主かくれなき通者、筋の通りたる事に、たのまれて一足もひかぬ男、と書いてあるのが一つだけしか見つかからない。この通者といふ言葉は、筋の通つた者といふ心持だといふこともこれで讀める。それが元文から寶暦まで、この三十年ほどの間に、通者といふのが任侠の意味らしく扱はれてゐる。前には廓の言葉として、粹だの通だのといふ言葉が遣はれてゐた。これが訓でよむやうになつて、通者といふことになる、今まで通といつた心持とは違つて、別な意義になつて參ります。きはひといふものは、その一人々々が目立たないで、團結して凄じい景氣になつた。後々までも雜輩の威張るところを『きはひ』といふ。元文、寶暦の間の名物であつた通者は、後には下落して『傳法肌』といはれるやうになつたかと思はれる。きはひ組の盛だつた當時は、親分らし

いものが目に立つて、雑輩末流の者はあまり見當らない。親分だけで子分は殆ど無いやうにも見える。さうしてそれが大概博奕をする者どもである。博奕の方で親分になるものは、いづれも押出しが立派でありました。これは前にも俠客と博奕打と混じてゐることを云つて、一つ二つの例を擧げて置きましたが、博奕打のことを『鬪人』といつて膈の病に喩へる、食ふかと思ふと直ぐに吐き出す、金銭も其の通りに持てない、それを善く集めて善く散じるとでも見たのか、日本左衛門——鼠小僧などの泥坊は、義賊といふ飛んだ名稱で呼ばれる、富者から奪つて貧人を賑はすといふので、非道の盗みをしなはいふ、さうなら有道の盗みといふのがあらうか、泥坊は勿論、博奕打にしても、善く散じることには或は出来ませうけれども、善く集めたものではありません、たゞ金の持てない——銭の離れがいゝ。そのところが大きに俠氣らしいやうにも見へるのせうが、只だ銭離れがいゝ、それが俠氣ではない、筋の通つたもの、理義に

眞闇な譯のものではあるまい、ですから俠客といふものと博徒といふものとは自ら違ふのであつて、俠客は俠客、博徒は博徒で、俠客のすべてが博徒でもなければ、博徒のすべてが俠客でもない。ですから博奕打のことを、寛保、延享の頃は『通り者』といつて居ります。これは金銭で幅をするので、さういふ者が四五町の間に一人か二人はゐた。この連中は博奕を打たない者に對しては甚だ謹んで、素人の事は旦那方と呼ぶ、非常に丁寧なものでありました。けれども錢に綺麗だから、自然とそこへ人が寄る。それが寛政の時分になると、なか／＼さう引込んでゐないやうになり、人柄を作るやうにもなつた。

白無垢鐵火となる

本材木町にゐた七郎兵衛なんていふ通り者は、常に袴を穿いて御免駕籠に乗る。さもなければ馬に乗つて、供を連れて歩いたといふやうなわけで、なかなか

か人柄を作つたものだ。かういふ按配ですから、内外表裏ともになるべく穢いところを人に見せないやうに、隠すやうにする。これが通り者といふ中の一種で、その中の品のいゝもの、それを白無垢鐵火といつてゐました。この白無垢鐵火に就ては、寛政元年に書いたと思はれる『御府内雜話』に委しく書いてありますから、それを舉げて置ませう。

御府内盗人多き事、京大坂に十倍せり、尤追年御繁昌に隨ひ、人數も多く候得共、全く博奕の多き故なり、しかし近頃の御觸にて十が四五位は減じも仕候半哉、誠に相止たるにあらじ、只見合せて居る心也、前文にも申上候通、名主町役人取りよき町には、眞にこれなき様子に候得共、又博奕打の頭分のある町方は、自然と其惡黨共、常に心易く音信する故に見のがしにする心より大小共に相止ざる所もある由、右博徒のかしらと申ものに、上中下三段も四段も有之事に御座候、たとへば御藏前にて

は誰、西河岸にてはたれ、小田原町にては誰、品川にては誰、吉原にては誰、龜島にては誰など、申すは、大通とも通り者とも、白むくでつくわとも申者のかしら分の者共なり、常に相互に驕にくらして、黒羽二重を著し、元來極文盲故、茶の湯はいかいをすこし稽古いたし、遊女藝者にふけり、美味をくらひ、常に不埒、其うへ事のまへにて申譯もこれなき不屈成る事を業として渡世いたす故に、不如意の砌は、さまざまの惡智を催し、町家の若き子どもを引込、種々の惡業を教へ、又御武家方御あそび好きの殿様方へ入込、種々惡道御すゝめ、終には御家を亡す事も有之よし、惣べて年若き町家の子どもなどは、是をよき人とうらやみ、便りを求め、近づきになりたきと申もの、夫より子分とも兄弟分とも相成、遊所惡所へ誘引して終には例の博奕に引込、數代の町人も終には宿なしとなる事多し、此類の惡黨に付添居る俳諧師茶人太鼓持惣てはよほど數多き事也、此惡黨共

御退治被成下度もの也、右の分は上の博奕打なり、又茶の湯もしらず、俳諧も知らず、只博奕のみにして一向悪事も仕らず、正統の男を建て、子分親分と申事澤山にて土場と唱へし博奕打場を持つ、是東西南北共に有之候よし、先年も有之候、おぞう吉五郎、金看板(龜屋甚九郎)、明和二年六月廿六日死、七十二、此の金看板は武家奉公口入業をなせりなどと申すもの、類、是中の通りもの也、又其手下の内にも頭立ち候もの、岡賣女(私娼)有之場所所防ぎと申候て、品川にては誰々、深川にてはたれ、靈巖嶋にては誰、氷川にては誰と申事あり、是も相應に子分の親分のと、右賣女屋より上まへを取、大勢暮すもの多し、然ども此中下の方は密々には悪事も有べけれども、又喧嘩口論惣て物事毎に取静め、又は此もの手下にて盗人御吟味の御一助にも相成候事も有之よし、尤彼等は悪黨と申義、表向きにして何も御府内の風俗にかゝはる事なし、只今にも召出され候

て仰渡され候とも如何様にも相成べく候事、直に御自由の事に候、只前文に申上候、上の白むくでつくわと申類の悪人共は、諸方御役人方へも御出入いたし、其權をもつてさまざま悪事いたし、御府内町風俗も、此もの共より悪敷なり候事多し、この通り者の中でもごくいゝのが白無垢鐵火でありまして、中或は下といはれたのが金看板の甚九郎、おぞう吉五郎などといふ連中、後來これが芝居にもなつて居ります。又江戸ツ子が幅を利かして氣前を見せるなんていふ時には、此等がいゝ背景になるのです。併しこの通り者の上といはれる白無垢鐵火は、どんな影響を世間に與へてゐるかといふと、享保以來山師、川師と申しまして公益と私利との兩方に引かけて、金持と當局者との間を立働く、丁度今日で申す所謂利權屋なるもの、體裁を具へてゐる。世の中が固定して、金もこづんでしまふ。さういふ時に山師、川師などといふやうな者が出て來るので、地道で

は金儲の少い時に、大儲をすることを考へる。儲けられなくても、儲けられさうに見せて、その間で儲ける。さういふハメに立つて仕事をするのが白無垢鐵火であります。中以下の通り者の方は素性を隠さない。有體に自分を打出して娑婆ツ氣も強いし、外聞も取繕つてゐる。いくらか生地のところが多い。任侠の風もあるやうに見える。俠客といふものが博徒の又の名になる。その道をつけたのが、この通り者であるやうに思はれる。

通り者の上といはれる白無垢鐵火は、中下の通り者よりもたちが悪い。同じ博奕をしてもイカサマ博奕の方で、素性も何も見せない。何も彼もが狡猾に行かうとする。この白無垢鐵火といふ名稱に就ては、西澤一鳳が解説してゐます、昔は武内宿禰と甘内宿禰とが争つて、熱湯に手をさし込んでその正邪を神にたゞしたといふことがありますが、鐵火を執るといふことは戰國時代によく云つた言葉で、天神地祇に誓つて火で眞赤に焼いた鐵を掴み、それで火傷をしない

方を勝とする。善惡正邪の争の時、鐵火を執つても自分の主張の正しいことを見せるなんていふ事があつた。一か八か、神祇の罰利生を靦面に見ようとする。テキパキ片づくところから『鐵火』といふ言葉を生じた。白無垢といふのは江戸時代に平人の著用を許さない衣類で、旗本衆でも高級な人とか、高級な神官僧侶とかいふものに限つて著用する。それを著てゐるのは鷹揚な殿様らしい姿、といふことになる。さういふ殿様らしい衣服を著けてお品ぶつた人、それが不人柄な勝負事に耽る。白無垢を著けた人が鐵火の争をする。見かけによらぬといふことを形容する言葉なのでせう。この白無垢鐵火といふものは江戸の末までありましたが、これはひどい害毒を江戸に流して居ります。吉原に通ふものが、俳名を呼ぶやうになつたのも、白無垢鐵火からの仕癖だ、江戸ばかりではない、いつでも白無垢鐵火はあつて、どの時代でも始末にならぬものゝ一つであります。

本所の道源およし

それから下の方の通り者の中に『店頭』といふものがある。この方で知られたのに、本所入江町の鐘撞堂の際に、道源およしといふ女達が居りました。およしは土地で知られた道源小僧吉五郎といふ者の女房で、吉五郎は道具屋源七といつて、つまらないがらくた商人でありましたが、江戸の岡場所の中でも、三田、堂前、入江町などと申すと、ごくく下等な、切店といふ私娼の居るところですが、本所の入江町は延享の頃から大分繁昌し出しまして、路地の數も裏表新道共に四十一、そこに居る娼婦の數も千三百餘人を數へるやうになつて參りました。それだけひろがつて來るうちに、甲州屋路地といつて、その兩側に長屋が建つてゐる、その長屋に居る女達は一晝夜に金二分づゝといひますから、吉原の座敷持と同じ揚代でありました。揚代が高くなると、衣裳道具も華

魁に比べても恥しくないほど立派になり、土地も賑はしく、客も大勢やつて來る。町はだんく私娼の爲に繁昌して參りますと、人が混雜するにつれて、喧譁があるとか、怪我人が出來るとか、種々な出來事がある。道源吉五郎は町内の口利でありましたから、そんな時にはいつでも飛出して行つて始末をつける。それが又上手だといふので、いつとはなしに土地の者から立てられて、いゝ顔役になりました。場所柄だけに公事出入が多い。それをも吉五郎に頼むやうになつて、遂にその店頭といふものになりました。何時でも其家の人身御供になる、私娼地域の犠牲なのですから、町内の首代といふわけで、私娼一人に燈一つ、その燈を數へて一燈に就て毎夜四文づゝの上げ錢をする。私娼の數が多いから、吉五郎の所得は毎晩一兩以上になつたさうであります。吉五郎はさういふ風に持囃されるから、吉田町長倉町あたりの夜鷹、猪の堀の船饅頭の方も世話を焼いて、この方からも上りがあるやうになり、がらくた道具屋であ

つた吉五郎は忽ち大金持になつた。吉五郎はこの盛り場の用心棒ですから、何事があつても自分の身に引受けて始末をする。そのうちにどんな罪があつたかわからないが、鈴ヶ森で獄門に掛る事になつてしまつた。女房のおよしが亭主の死後に名高くなつたのは、夜中に鈴ヶ森まで出かけて行つて、番人の乞食に金を遣り、亭主の獄門首を首尾よく盗み出しまして、風呂敷包にして持つて歸り、土地の本佛寺といふ寺で立派な葬をした。およしはその時三十四五だつたといふことです。この膽ツ玉が評判になりまして、亭主の跡を引受けて女の身で入江町の店頭になり、長屋の防ぎ役になつて、江戸中の人に知られるやうになつた。これは女の通り者です。

小女郎源四郎

又深川森下町にも小女郎源四郎といふ通り者が居りました。この源四郎は仲

間からお頭と崇められ、いろ／＼な出来事を持ち込むのを、必ず上手に片づける妙な智慧を持つてゐた。元來は小女郎菓子といふ菓子を賣つて歩いた男なので後々までそれを異名に呼ばれたのですが、博奕が好で度々負けるものですからその菓子賣もしてゐられない。三文商内位では間に合はない。そこで火消屋敷へ飛込んでガエンにもなれば、非人の仲間にもなるといふ風でありましたが、そんな事をしてゐるうちに、仲間博奕で大勝ちに勝つて、身上を立直してから大橋の店頭を頼まれて、一晚に一分づゝ上るやうになつた。

この店頭といふものは、私娼のあるところには何處にもあるので、本所深川に限つたことではありません。店頭といつて、その場所その場所の防ぎをする。品川で誰、深川で誰といつて名高いものでありました。店頭に就てはついでだから少し云つて置きませう。

店頭は一年千兩

私娼の居るところを御構場と昔は云つて居ります。深川には六箇所ともいひ七場所ともいふのですが、それは仲町、入船町、向土橋、表裏櫓、裾繼、大新地、新石場、古石場、常盤町、網打場などです。又その外に品川、千住、板橋、内藤新宿、音羽、小塚原、根津、谷中、市ヶ谷、赤坂、松井町、入江町など、多い時には江戸中で、その場所を四十箇所近くも數へたことがあります。新宿、品川、千住、板橋などは、いづれも旅籠屋でありまして、娼家といふものではない。その旅籠屋に飯盛女といつて黙許された賣女が居つた。これはいづれも五街道といつて江戸の出口であります。そこに黙許された私娼が居つたのであります。宿場では一軒に何人限り女を置くといふきまりがあつて、餘計に女を置いてゐる家では、店先へ出して置くのはきまりだけの人數にして、その餘

は陰見世といつて、表見世の裏の方に据らせることにしてゐました。この方は黙許されてゐるので、格別に人數の制限を超過しない限り、また何か特殊な出来事でもない限り、その筋から手を入れることも無い。殊に品川などになりますと、飯盛女を持つてゐない旅籠屋を平旅籠といひます。飯盛女を持つてゐる上等な店になると、本陣と同じ稱、即ち『廣間』といふ唱を以て呼んで居つた。この方には店頭も居らず、又『通り者』といつて、何處々々までも名の響くやうな男もゐない。通り者の部類の人間もゐたには相違無いが、此處にはさう名高いのは居りません。

然るに全く黙許もされてゐない場所、本當の賣女御構の場所になりますと、御構といふ言葉は昔は禁制の意味ですから、娼家も料理茶屋とか、煮賣茶屋とか、水茶屋とかいふことにしてある。かういふ方は時を嫌はず檢舉される。私娼を檢舉されると、昔の法律としては、その建物及土地を取上げることになつ

店頭は一年千兩

てゐる。さういふ場所で店頭をしてゐる者は、そこで大に働かを示すので、何とか彼とか理をつけて、大事にせずに済すやうにする。土地や建物を取上げられてはその町の迷惑になつて、賣女屋も立行かぬことになるから、賣女屋どもがどうやら立行くやうに、その町の利益になるやうに働いて行く。それ故に御構場所といふのは表向だけの名で、その實は表晴れての賣女屋なのであります。さういふ働かがあるところから、名主と並べて店頭誰と書く。所の取締は勿論のこと、その出来事は何によらず取捌いて行く。町與力、町同心には取入つて、出入もすれば音物も贈る。さうして喧嘩、人殺、火付、盗賊、或は賣女の變死、さういふ事があつても、いゝ按配に内済にして済すのであります。それですから根津の盛であつた時分には、店頭某の弟が役者でありまして、それが大變評判な男色であつたので、それを時の老中にするめて、その御蔭で根津が大變便宜を得たなんていふ話もある。町奉行に自分の娘を妾に出して、その

土地の便宜をはかるやうにした店頭もあつた。斯うなると多少白無垢鐵火の畑を荒すやうになる、若し事件が起つて費用がかつても、さういふ時はかゝり次第で、その町の賣女屋から取立てる。きまりの収入としては、燈一燈に就ていくら、賣女一人に就ていくら、といふ風に取上げるのですが、臨時の費用はその外になつてゐたのであります。

定式に取立てられる店頭の所得は、根津、谷中、本所入江町等、どんな土地でも一年に千兩以上あつたさうです。その金を撒いていろゝな方面に働かすから、名高い男達にもなれるわけだ。白無垢鐵火の通り者に比べて、この方はお品が悪い。けれどもこの方が押が強く幅も廣かつたのです。その代り又随分無法なやつも居りました。寛政の話ですが、音羽の鼠坂長屋といふのがあつて、その店頭に金魚増、カチャ金といふ者があつた。このカチャ金がかゝくの働か者で、鼠坂長屋はこの男の爲に繁昌したといふ位でありましたが、

そのお袋が大變なやつで、姐妃といふ譚名があつた。或時このお袋が倅と喧嘩をして、出刃庖丁でミネ打にする。カヂヤ金は庖刀を撈ぎ取らうとして、お袋に怪我をさせた。何しろひどい婆ではあるが、年を取つてゐたのですから、疵はなほつたけれども、それがもとで死んでしまつた。評判なカヂヤ金のことではありませんから、お袋の葬だといつて大變賑かな事をやつた。ところがあまり立派な葬式をやつた爲に、お袋の死因をその筋から疑はれる端緒になつて、埋めた死骸を引出して檢視するといふことになり、カヂヤ金は親殺しといふことにきまつて入牢致しました。さうして吟味の濟まないうちに牢死したのですがこの騒ぎの爲に鼠坂長屋といふものは遂に取潰しになつてしまつた。店頭の遣方が直にその土地の繁昌に影響するのですから、その土地としてはその爲に餘計な金も出す筈です。又その金を上手に遣つて、種々な障害を除けて行く働きをするのだから、店頭は評判な者になれたのであります。

切支丹一揆の請負

鞘町の東國屋伊兵衛は江戸一の水鳥問屋の隠居でありまして、安針町の店の方は息子に源八といふ者がある、それに譲つて、自身は氣樂に日々を芝居と吉原とで過して居ります。芝居と吉原で伊達な事をするのはこの東伊がはじまりで、後には藏前の連中などが皆さうでありました。芝居や廓で見えを張つて男前を見せる。それだけで人の噂にもなれば、後に名も残る。それだけ江戸の民衆の間には、悪場所といふものが引立つてゐたのであります。この東伊といふ男は見え坊でもありませんが、なか／＼快濶な氣分の男でもあつた。嶋原に切支丹一揆が起つた時、西海道の諸大名は残らず出陣し、將軍の御名代として板倉さんが行き、松平伊豆守が行くといふ按配で、随分大骨折であつたが、若し今時分あんな事があつたにしても、町人の請負で一揆をぶつ潰したら、入費も

少くして濟むだらう、さういふ事が入札になるやうなら、この東伊などは思ひきつた安札を入れて引受けようものを、といふことを何時も得意に云つてゐたといふ。笑談にもせよ、あの天草騒動を入札で請負にしたい、と云つてゐる氣持は、通り者らしくないこともない。東伊は若い時は器量自慢で、なか／＼男前もよかつたので、方々歩き廻つては相手構はず喧嘩口論をして、一度も負けなことが無いといひますから、腕ツ節もかなり強かつたのでせう。博奕が好で、よく大博奕をした。それも強情な張り方をするので、『東國屋張り』といふ名がついた位な張り方をする。出て行つた初に丁を張れで、負けても何でも丁で押通す。半で張りはじめればしまひまで半で行く。氣前を見せる博奕の打ち方で、これが評判の一つになつて居りました。

天狗除のお守

東伊が獵に出かけて、何か間違が起つた時などでも、一件が落著するまで安針町の店をしめなかつた。そんな事は普通の町人どもには出来ないのですが、この男の女房といふものは、吉宗將軍が江戸へ出て來られた時分に、紀州から御供して來て御側役をつとめてゐる澁谷和泉守良信といふ人の妾であつたのを貰つたので、その方の蔓もあるから強情な事をし勝ちなのであります。この倅に東里といふ者がありまして、本郷に『まし屋長門』といふ菓子店を出した。この東里は澁谷の落胤だと云はれてゐます。まし屋の話に就ては、いろ／＼あつて、鷗外博士なども書いて居られるやうです。一體澁谷と東伊とはどうして係合が出來たかといふと、澁谷の領地が下野の都賀郡にあつて、東伊はこの都賀郡の者だつた。それだけしかわかつて居りませんが、どういふ事かがあつて、それ以上に結びつくやうになつたのだらうと思ふ。東伊が馬鹿らしい羽振を見せたのも澁谷の御蔭なので、世間に東伊が光つて見えたのは、吉宗將軍の御氣

に入りといふこともあつた。これは無論澁谷が取持つて吉宗將軍の御耳に入れるやうにしたのでせう。それに或年巢鷹御用といふので、日光の山深く入つて行つた、もう樵夫さへ行かうとしない位の魔所、天狗の住ひといはれる場所へ出かけて行きましたが、案内の百姓が、もう日暮でもあり旁々、そんなところへ行くのはおやめなさい、といつて止めるのも聞かず、そんならお前は歸れ、といつて案内の百姓だけ返し、東伊は貪著なくどんく山奥へ入つて行つてその夜を明した。翌朝途中から引返した案内の話を聞いて麓の村方は大騒ぎになつた。それでは昨夜天狗に引渡はれたらう、棄て、置くわけにも行かない、といふので、村人が大勢で尋ねて参りますと、東伊は岩角を枕にして大軒で寝てゐる。村の人達は驚いて、昨晩かういふところで何事もございませんでしたか、と聞くと、よく眠つたから何も知らないが、どうも皆に心配をかけて相濟なかつた、といふ調子だつたので、土地の人はそれですつかり感服させられてしま

つた。その後になつて松平兵部大輔が日光御普請の御手傳を命せられた時も、東國屋がその工事を請取つて、又日光へ出かけて行つた。まだ先年の話が残つてゐるので、天狗除の守札を貰はうといつて、百姓が大勢、東伊の宿屋へ押掛けて來た。東伊は平氣なもので、よろしいといつて小菊の鼻紙を小さく切り、印形の裏判を片端から捺して渡すと、百姓達はめいめいにそれを持歸つて自分の家の門口へ貼つた。東伊の天狗除の守札が、それで名高くなつたなんていふ話が残つてゐる。

寶曆七年の正月に新材木町から火事が出て、葺屋町、堺町の芝居が焼けたことがある。東伊は早速見舞に行つて、市川柏庭、瀬川仙魚の二人を自分の家へ連れて來た。こうして極めのついた三箇津の名人を一人ならず、二人まで助けた、といつて吹聴した。さういふことをして自分をひろめるのに骨を折つてゐる。まあこれは通り者といふ中でも罪の無い行き方で、一方から云へば馬

鹿々々しくもある。

新場の九郎兵衛

それから又新場の肴店に九郎兵衛といふ通り者があつた。これがいつも吉原へ行つて伊達遊びをする。或日中の町の近江屋といふ茶屋で、心易い女郎ども取りませて酒を飲んでゐるところへ、大門口の方から肴賣が一人「鯉こい〜」といつて入つて來た。それは新場の八といふ棒手振だつたので、九郎兵衛は見かけて呼びとめた。何しろ一方は肴問屋の主人でありますから、これは九郎兵衛様でございますか、といつて盤臺を下して會釋をする。九郎兵衛は、一つ飲んで行きな、といつて盃をさす。相手が棒手振だから、茶屋の亭主も女共も、お上んなさいとも、お掛けなさいとも云はない。九郎兵衛はそれには構はず、こゝへ〜といつて自分の側へ呼んで、亭主へは吸物を一つ出してやつてくれ、

と命じた。それから八の懐へそつと小判を一兩入れて、耳に口を寄せて、これを花に打つんだ、と云つた。八は盃を亭主にさして、その返盃を押へて盃臺の上へ小判を一枚置いた。相手が肴賣だけに小判一枚出したのを見て、そこにゐた者が皆びつくりした。それをキツカケに八は、又盤臺を擔いで「鯉こい、鯉こい」といつて、二丁目の方へ行つてしまつた。さうすると九郎兵衛はその後姿を見送つて、おらが町内の者はみなあの通りだ、と云つて大味憎だつた。そんな氣持もあつた男なのですが、それでどうだといへば別に何の事でもない。この時分にはさういふ男が随分あつたので、田町砂利場のじやうきら金右衛門、三田同朋町の上見ぬ鷺の長左衛門、高砂町の遠州屋小四郎、これは人形芝居の座元です。神田鍋町の大工次郎右衛門、小梅の錢座を引受けてゐた甚左衛門なんていふ人達も、皆こんな事をやつてゐた。

通り者もいろ／＼ある

通り者といふものは種類が甚だ多いのですが、道源小僧と東伊と比べて見ると、随分行き方が違ふ。それでも皆通り者といはれてゐる。又その通りものから大通といふやつが出て来る。そこからいへば東伊の方が通り者らしいし、九郎兵衛の方が大通らしい行き方のやうに見える。九郎兵衛と時を同じうして出た尼崎一湖なんていふ人の話もあります。この人の事は『老の長咄』に出て居りますが、當時相撲を抱へることは大名に限られてゐて、町人には許されてゐなかつたのに、一湖は内々で抱へる。それもなか／＼大勢抱へて、賑かな暮しをして居りました。或日堺町の茶屋から一湖のところへ拂を取りに来た。此方から持たしてやるから、といつて返すと、間もなく又催促に来た。さうすると一湖は、己が今行く、と云つて叱りつけた。そんなにせたげるにも及ぶま

い、といふわけです。それから近邊の鳶の者を十人餘も連れて、その茶屋へやつて来て、今度は先拂にして全部勘定を済まして、さて亭主に向つて云ふには、己に對して一日に二度も催促するとは怪しからん、どうしても勘辨出来なゝに打壊させるが、いゝ、といふことだから皆びつくりした。いくら詫言を云つても聞かない。その代り壊したあとには、もとの通り普請して返してやる、諸道具の中で惜しいものがあつたらのけて置け、と云ふかと思ふと、連れて来た鳶の者を顧みて、さあ敲き壊せ、と命令した。瞬くうちにぶち壊してしまつたが、直に又職人に云付けて、障子襖から疊に至るまで、前よりもすつと體裁よく拵へてくれた。結局茶屋の方では怒られた方が仕合な位のものだ。ものゝいきさつでこんな事をするのが、通り者とか、大通とかいはれるやうな風になつて參りました。

即金で打壊す

藏前の十八大通といはれるものゝ中で、曉雨の話の馬鹿々々しいことは前に云ひましたが、利倉屋利右衛門といへば、藏前の札差でも同じ暖簾が五六軒もある、大きな札差の方であります。利右衛門は銀の針金で例の藏前本多といふ髪に結び、鮫鞘の一本差で、両手を振つて町を歩いてゐる。無論下駄穿きで、両手を振つて歩く。随分をかきな身振だから、町内の床屋に集つてゐる若い者共が、その様子を見て笑つた。さうすると利右衛門はこの店へ入つて行つて、人を馬鹿にした奴等だ、手前の家を敲き壊すからさう思へ、と云つた。店の者は手を擦つてあやまつたけれども、どうしても承知しない。それから若い者を呼んで来て、その店を敲き壊して、皆が仰天してゐるところへ、小判を一つかみ投出して行つてしまつた。尼崎一湖のと同じやうなことで、義侠でも何でも

ありやしない。たゞ自分の幅を利かせる、威張つて見せるので、十八大通といふものも畢竟金で面を張るといふまでのものである。それですから藏前の事を書いたものゝ中にも、寶曆から安永、天明までの間に大通が出た、面白いやつもあつた、寛政、享和となればもうそんなものは無い、又た文化、文政には風俗が變つて来たから、をかしいやつが出たけれども、昔の男達の眞似をするやつが無くなつた、といふやうなことが書いてある。金を遣つて人の店を敲き壊すといふやうなことを、昔の男達の風と思つてゐるのも大きな間違であります。が、札差どもが馬鹿々々しい利益を得てゐるのも、寶曆から寛政改革前までの話で、馬鹿々々しい高利を取つて金を儲けた時代だから、さういふふざけた眞似をしたのだらうと思はれる。

空元氣の下駄組

世の中に何か必要があつて出て来た大鳥一平とか、幡随院長兵衛とかいふ者とは又話が違ふ。そこでこの時分にはやつた、といつても札差どもだけの話でありませんが、藏前本多といふ髪かみの結ゆひ方かた、勿論芝居好みのものです。大口屋曉雨は黒羽二重に伊達紋をつけ、芝居へ出る助六の通りとほのなりをして吉原へ通つたといふ。同じ大口屋の金翠は意休好みといつて、曉雨の向ふを張つて芝居へ澤山の贈物をして見せたりした。札差どもの子弟で吉原へ壻むこに行つたやつがあつたりして、藏前と吉原と親類になつてゐた關係から、吉原から芝居へ積物をする、芝居町から吉原へ贈物をするといふやうなことが此間にあつた。曉雨でも金翠でも、藏前の少し變つた札差どもは、皆日和下駄よりのげたを穿はいてゐる。芝居の助六ばかりぢやありません。この時分まで江戸の一般の穿物といへば、雨が降つて下駄げた、さもない時は草鞋わらじか草履さうりといふものでありましたが、天氣がいゝのに下駄げたを穿はくといふことは少し妙な、伊達な人に限るやうなことになつてゐて、

下駄組げたぐみといふと、きはひの連中れんちゆうのやうに思はれた。何故晴天の下もとに下駄げたを穿はくのが『きはひ組』のやうであつたかといふと、元祿度の小田原町は繁昌して居つたから、路面が年中乾かない。いつでも長雨の降つたあとのやうだから、無論草履ぢやいけない、雪駄せつたでもいけない。そこで若い手合わかてあひが誰でも下駄げたを穿はく。たゞの鼻緒はなをぢやいけないから、下りの革鼻緒かばなをを上げて穿はく。下駄げたといつて嶋桐の目のこまかい、いゝ臺だいへ榎かしの齒はを入れて穿はいた。この若い手合わかてあひの元氣げんきがいゝものですから、それが自然河岸から溢あふれて他の町々に及およぶ。元氣のいゝ者は下駄げたを穿はくといふ癖くせがついて、それが藏前にも影響えいぎやうしたわけなのです。

本多忠勝の遺風か

それから本多鬘ほんだまげ、これも前には辰松風たつまつふう、文金風ぶんきんふう、卷鬘まきびん、付鬘つけびん、合鬘あはせびんなどといふことがありました。古いところでは肴賣さかなうりや日雇取ひやうとりが三折そりといつて、元結一寸もつとひすん、

鬘一寸、刷先一寸といふ鬘に結つて居りましたが、それがいつの間にか皆本多になつた。明和、安永度には、銀杏本多、金魚本多、水髪本多、疫病本多などといふいろいろなものがありました。この本多といふ名稱に就ては、本小田原町の略だといふ説があつて、この髪結び方は肴店から出たものだといつてゐる。名義は果して本小田原町の本の字と田の字を取つたものかどうか知りませんが、この形は小田原町から出たやうであります。中剃月代は鬘の内側まで剃つて、その塚が無い。元結は三つより多く巻かない。この好みはどうも肴店から出たものらしい。中村仲藏の書いた『月雪花寐物語』などには、後から見ると髪がぐるりばかりだから、坊主だか、野郎だかわからない、だから疫病本多、はつつけ額、かつたい眉毛なんていつて、大たぶさのやつも月代より後へ中剃を大きく取つて、百本ばかりの毛へ元結を掛けてゐる。頭の中まで額を抜きかけ、眉毛まで細くして二三本並べてゐるやうに見える、と書いてあります。

これに就ては又本多平八郎忠勝、あの家の風儀をきめる時分に、士から足輕、中間に至るまで、前七分後三分といふことにきめて、紙小撚で根を結へ、それを七つづゝ巻くことにした。この髪のきまりが本多風といふので、本多風といふ髪は本多忠勝の家から出たといふことが一方で稱へられて居りますが、それは月代の工合が大分違つて居ります。それよりも『北條五代記』に書いてある髪の方、後の本多に近いやうに思はれる。ですから本多は先づ小田原町から出た髪といつてよからうと思ふ。それがひろがつて通人、大通といつた人の髪形ともなり、後々の江戸ツ子といふものゝ頭つきもさういふ風になつた。それから小田原町、新場の者は、著物の下に紅襦袢を着て居りますが、それが芝居の男達のなりになつてゐる。小田原町の風が大分一時の流行となつたばかりでなく、長いこと江戸の習俗の上に残つて居りました。

河東節や四時観

又江戸節の中でも河東は有名なものでありますが、これは小田原町の御納屋、天満屋藤左衛門の伴藤十郎が創めたものといふことです。小田原町から出たものはまだこの外にもあつて、其角の弟子の白雲なども、どうも肴店の人であるやうに思はれる。杉風は小田原町や新場の方ではないけれども、あれも肴屋さんでありました。けれどもさういふ風のもは、江戸の低い階級の人には影響を與へない。河東節さへ交渉が無いほどですから、俳諧の發句のといふことは無論縁が遠い。五色墨とか、四時観とかいふが、いづれにしても武士や町人限りで、その町人といつても無産階級の方にさし響きは無い。其の後よつほど低いものになつて來たやうですが、それでも慶紀逸などの方にもペランメエ連中はゐないやうだ。それから又下つて柄井川柳、これは柳川町の家主だつたさう

であります。この方の畠にしても、御家人とか商人とかいふものであつて、ペランメエの畠ぢやない。まだく〜ペランメエを見物する方の階級のものであります。俳諧や發句は江戸の中流どころの武家や町人の趣味、嗜好とは大きな關係を持つて居り、それから養はれたやうなところもあるけれども、一般の江戸の者どもは文字に縁が無い。何しろ手習をしたことの無い手合で、書かずに濟み、讀まずに濟むものではないのだから、俳諧や發句は手遠になる。地口や洒落だといつて、文字でなしに口頭で濟むものならば、いくらか御縁がある。芝居でさへ彼等との關係が遠いので、それよりは茶番の方が彼等に近い。江戸の一般の者どもには、茶番の趣味、落語の趣味といつたものが多い。狂歌にしたところが御齒に合はない。ですから鯉丈が『和合人』の中で、地口歌、五目歌とでもいふ名をつけたい。落首へ地口、流行唄、惡對、何でも彼でもやたらに浚ひ込んで、三十一文字にこじつけて拵へたら面白いだらうなんて云つてゐる

けれども、それだつて、とても文字に縁の無い手合を牽つけることは出来ないだらうと思ふ。

威勢のい、木遣

そこへ行つて驚くべき力のあるのは唄である。これは文字に拘らない。耳から聞いて興じ、うたつて氣持がい、といふ風のものでありますから、前の魚河岸の氣持が髪結びぶりや穿物によつて、久しく傳へられたのと竝んで、木遣がはやつたり、木遣くづしが喜ばれたりして、淨瑠璃から流行唄に至るまで持込まれてゐる。今でもうたつてゐる清元の『神田祭』、忍頂寺務さんの考證によれば、あれは天保十年九月、河原崎座で開いたもの、さうして猶文化十二年の祭禮に、通旅籠町で出した山車に富本豊前太夫が音頭を取つて、女藝者が若衆のなりで木遣をうたつた、といふ記事を引證してゐます。が、これはこの頃

では御祭のきまりであつたやうです。町田博三さんは、歌曲の中へ木遣を取入れることは、富本の『全盛操花車』文化元年に市村座で演じたのが最初だらう、といつて居られますが、これは豊後三派へ取入れた最初ぢやないかと思ふ。

一體木遣といふものは古いものであつて、來歴も長いのですが、木遣といひ、石引といひ、鐘引といつて、重い物を引く時には唄をうたつて引く。それが後には火事場へ出かけて行く火消がうたふやうになり、棟上にも、地形にも、果は御祭の山車を引くのにも使ふやうになつた。木遣、石引といふものが當用以外に用ゐられるやうになつたのは、何時頃であるか知りませんが、『松の葉』に『木やり』といふ題で、佐山檢校の作として傳へてゐるのが一番古いやうだ。この『木やり』の文句を讀んで見ると、いろいろある木遣の文句を継ぎ合せて、其の間へ吉原の遊女の名を取入れた、かなり長いものであります。此等が古いんぢやないかと思ふと、踊の音頭、踊くどきといふものゝ方に用ゐられてゐる

ことは、寛文、延寶度のものにも見受ける。友甫でありますとか、道念山三郎
 でありますとかいふ人々は、その方の名人上手として知られて居ります。さう
 してその踊の音頭は、盆踊に於て、舞臺に於て、又廓にあつた踊場に於て、隨
 分盛に使はれて居りますから、木遣や石引が當用以外に用ゐられたことも、よ
 ほど古いだらうと思ふ。けれども古い上方の話は、むやみに江戸の方へ持つて
 來るわけには行かない。何時から違ふか知りませんが、江戸の方が調子が高い
 し、拍子も違つてゐるやうに思はれる。江戸の木遣の張込などといふところは、
 最も調子の高いところであつて、どうも上方のとは違つてゐたやうである。さ
 うしてこの調子の高い木遣は、明和度の長唄に入り込んでゐるやうに思はれる。
 一體江戸節といふものは、半太夫にしたところが、河東にしたところが、調子
 の低いのが常であつたのに、寶曆以後に於ては、江戸の聲曲といふものが皆高
 い調子になつてゐる。これは古い三味線の胴と棹を見比べて考へて見てもわか
 る事です。それが一概に木遣のみの影響だとも云へないけれども、木遣がはや
 るといふことを全く取除けても考へられまいと思ひます。

ヂヤンと鳴たら

木遣がはやるといふことは、火事早い江戸で赤い風の煽りによるものである
 かどうか。『守貞漫稿』を書いた喜田川守貞は、大阪生れの人でありましたから、
 火事に出かけて行く景氣のいゝことを書いて、名主は野袴に火事羽織、兜頭巾
 といふなりで先頭に立つ、それに續いて家主がその組のしるしのある半纏、紺
 股引といふなりで、これも頭巾を被つてゐる、鳶の者は刺子半纏に猫頭巾、道
 具持は道具を持ち、その他の者は皆鳶口を持つてゐる、その出かけて行く時に
 うち揃つて木遣をうたふが、その聲を聞いてゐると、キヤア〜といつて如何
 にも殺伐な聲である、と云つてゐる。そんなものぢやない筈だ。木遣のことは

もう少しあとでも云ひますが、火事に出かける姿や景氣に就ては、大阪者の書いた記事なんぞを持出すには及ばない。「赤い風の煽り」といふ題で前に書いたものがあるから、それを出して置くことにしませう。

思ひ出す大津繪

火事を江戸の花といふが、世の中に物騒な花もあればあるものだ、だが江戸ツ子の元氣の大半は、火事が煽り出したらしくも見える、嘉永度といへば今日から七十餘年前だが、そのころの大津繪の文句に、

闇の夜にジャンとぶつつけ、寝巻で出かける纏もち、鳶の衆はかゝいが八百人、大鳶手鍵を打ならべ、半纏すいひにつぼ襦袢、さしこの股引で、組子衆は水の手まはして火を消す、大將めいて頭取はざいをふる、中にも引けを取らない纏持や、火事をながめ、半鐘をたゝいて、これはく火掛り

するのと、纏をかついでそのまゝいそいでしめりがね。

またかういふのもある。

あすは建て方、地ぎやうに木遣、鳶の遊びも餘念なく、こりやたが胴突、ちひさい中でも、人に知られし頭の子、みんなみなく皆來い、梯子はしご乗をしやうぞへ、先へ行くのが、この町の頭取、あとへさがるのは大屋さんに彌次馬、向ふ鉢巻で鳶や鍵で打つたぞへ、打つたがどうした勝手にしやう、キヤリ、ようい／＼よいやなへ、場所に凶事でもなけりやよい。元氣に繰出してゆく威勢、競つて働く火事場の凄じさ、江戸の子供が火事場ごつこに興じ、若旦那の火事道樂は落語に残りもした、戦争といふものを忘れてしまつた時代に火事ほど總てを勇ましくするものはない、猛火を制壓する消防作業、それを擔當する鳶の者が江戸ツ子の中心のやうに見られたのも道理、勇み肌といふのは専ら彼等の風采をいつた形容である。

攻めるのにも城下の民家へ放火し、落城の時にも焼き拂つて逃げる、戦争には火事が付き物だ、戦國の武士は火事に慣れてゐたらう、しかしその黒い煙、紅い炎の下に何ほど格別な戒愼があつたらうか、兵火でない太平の世界の失火に對しても、不慮の變を考へては決して油斷されぬ、武士が火事の際に武裝したのは、戦國傳來の古い精神に因循したのみではなく、町人百姓が生命財産の滅却を焦燥する外に、戒愼しなければならぬ事情もあつたのである。

町鳶と稱せられた民間の專業消防夫は、享保度に京都の仕組を江戸に適用したのでその前は民間に消防組はなかつた、民間の消防組が組織された後も、官設の消防隊は江戸の最後まで行動してゐた。

市内に十箇所の役屋敷があつて、御先手の旗本が十人、定火消を勤める、それは各與力六騎、同心三十人宛を従へ、ガエンと稱する消防手の同勢を率ゐて飯田町、四谷御門内、小川町、市ヶ谷左内坂、駿河臺、半藏御門外、溜池、御

茶の水、八代洲河岸に分遣されてゐた、また御大名火消といつて、幕命をもつて擔当地域を指定された諸侯が十一人あつて、民間とは關係のない、大手、櫻田二の丸、紅葉山、吹上、淺草の御藏、本所の御藏、増上寺、上野、聖堂(湯島)、猿江御材木藏を一人一所づつ、持ち場として、消防を引受けてゐた、またその上に方角火消といつて、大名が四人づつ、八人で、大手組櫻田組と分れ、出火の際に千代田城の警備方面を分擔した、此の三火消は幕府から命せられた大名旗本の役目であつたが大名自身の邸宅の防火のため、八町火消、五町火消、三町火消等があつて、自邸附近の火災に出勤する設備があつた、有名な加賀鳶は前田侯邸の防備として編成されてゐたのである、大名の抱へて置く消防夫は藩主の親戚や菩提寺の近火だと、騎馬の武士に引率されて、そこへ出勤する、これを御見舞火消といつた。

ガエンの空出

大名の抱へ消防夫は鉦付の頭巾やら大きな定紋の附いた胸當やら行装も民間のとは違つてゐる、さうして統率者も武士であつた、久しい太平で火事装束も大分な變革があつたものゝ、武士に附屬してゐるだけに戰國からの傳統が脱けない、武裝の俤を何時までも残してゐる、ダレ切つた世の中でも人を眞劍にするのは火事だ、生命賭けの仕事はたゞこれだけだ、誰も火事といふ飛んでもないものを向ふへ廻しては、梅は咲いたか櫻はまだかいな調子ではゐられぬ、武裝した昔を持たない町火消でも、そこに變りはない、けれども明曆、天和の大火災に奉書火消に出た擬勢は、何としても享保以後に見られない、奉書火消といふのは、火事の最中に特急な命令を發して、大名を出動させるのであつたが、記録は出動大名の働きの凄じさを後世に傳へて居る、その後には奉書火消

がなくなり、大名の意氣も衰へたのか、敏捷輕快な町火消に對して、大名の消防隊は頗る不鮮明にのみ眺められた、それも時世か。

とはいへ大名も武士なら旗本も武士である、旗本の定火消に屬するガエン、本來は役中間なのだが、一般にガエンとのみ呼んだ、ガエンは役屋敷の大部屋に起臥してゐた。彼等には衣服がない、年中法被一枚で暮す、奇妙に身體の綺麗な男振のよいのが揃つてゐた、寒中でも法被だけしか着てゐないのだから、彼等の文身が目立つ、白く肌膚に朱の這入つた畫面は何程美しかつたらうか、頭も助六のセリフにある生締といふのに結つてゐた、入湯も毎日三四度づつといふゆき方。

彼等は長い丸太を枕に十人も十五人も寝る、火消屋敷の火の見は高さ三丈に構造され、上層の檣に大太鼓が釣つてある。そこに晝夜とも二人づゝ見張りが居て、火事と見ればドンドバンと打出す、ガエンの大部屋にも不寢番が居て、

丸太枕まるたまくらのこぐち小口を木槌こづちでたたく、眞しんにたたく起すのだが、丸太枕まるたまくらをたたくられるま
 で寝ねてゐるやうな鈍にぶいガエンはない、櫓太鼓やぐらだいこにふと目をさます處どころか、夢ゆめかうつゝ
 の中なかに聞き附きつけて飛び起おきてしまふ、同じ武家ぶけの奉公人ほうこうにんでも、ウウンむにやゝ
 と一人づゝ起おこされる中間小者ちうげんこものとは元氣げんきが違ちがふ、町火消まちびけしは刺子さしての火事装束くわじしやうぞくに身みを
 固かためてゐるのに、ガエンは法被はつび一枚まい、肌はだも露あらはな姿すがたで火掛ひがりをする、これほど無
 法はふに強つよいものは何時いつになつてもマアあるまい。

その勇氣ゆうきを夏季かきになつて火事くわじがないと持扱もちあつかつてゐる、そこで空出からでが行おこなはれる、
 不意ふいに櫓やぐらの太鼓たいこを打うつ、ソレといふのでガエン一同どうは鯨波とぎの聲こゑを揚あげて役屋敷やくやしき
 を繰出くりだす、さうして彼等かれらが門外もんぐわいへ出るや否いなや半鐘はんしやうを鳴ならして引揚ひきあげさせる、役
 屋敷やしきの火ひの見みには太鼓たいこと半鐘はんしやうとが備そなへてあつて、出火しゆつくわには太鼓たいこ、鎮火ちんくわには半鐘はんしやう、
 鳴なり物ものを替かへて差引さしひきした、空出からでは火事くわじのないのに出でを掛かけて、出動演習しゆつどうえんしゆをする
 のである。

江戸第一えどだいいちの元氣げんきもの、如何いかにも壯快さうくわいに見みられてはゐるたが、ガエンが江戸ツ子
 の中心ちゆうしんになれなかつたのは、彼等かれらが役屋敷やくやしきに住すむ役中間やくちうげんで、市街しがいで暮くらさなかつ
 ただけではない、彼等かれらは平生役屋敷へいぜいやくやしきの大部屋おほべやに起臥きぐわし、そこへ博徒ばくとを引入ひきいれ年
 中ちゆうの大賭場おぼとばにしてゐた、往々わうわうにして酒屋料理屋さかやれうりやを荒あら、諸興行しよこうぎやうには木戸錢きどせんを拂はら
 はないなど、随分ずぶん亂暴らんぼうな風ふうであつた。特に商家しやうかが困こまつたのは錢緡せんしやう賣うりであつた、
 江戸えどの小賣商人こうりしやうにんは穴あなのあいた錢せんを取扱とりあつかふので、藁わらを綱なつた錢緡せんしが入用にふようであつた、
 入いらないといはせないやうに、ガエンはその錢緡せんしを持つて商家しやうかへ來きて買かへとい
 ふ、買かへば法外はふぐわいな値段ねだんを吹掛ふきかける、入いらぬといへばグヅル、味あじな凄すごい文句もんくを並なら
 べて店頭てんとうを動うごかない、何かと酒さけにしたがる、町家ちやうかでは火事くわじの時ときの混雜こんざつ紛まれに如い
 何かなる亂暴らんぼうをされるかも知れぬと、そこに弱味よわみを持つて、ガエンを腫はれもの扱あつかひ
 にすると、彼等かれらは圖ずに乗のつて威喝みかつがましくのみなつた、それでは相手あひてになる者
 がなくなる。

幡隨院長兵衛のセリフ

江戸の町々の負擔では消防費が一番重荷であつたが、それは消防夫を潤すものではない、全市に火消の頭取が二百七十餘人もあつて、世襲のも當人一代だけのもある、消防夫は頭取の下に、カジラと呼ばれる、組頭、纏持、梯子持、平人、人足(これは火消の數に入らず、俗に土手組といつた)の六級になつてゐた、享保に四十八組であつたものが嘉永度には百五十二組になつた、江戸の擴大に伴つて増員されて往くのだ、従つて數多い頭取も一薦二薦御職などといふ唱へがあつて、御職といへば顔役で、江戸中へ名の通つた男に極まつてゐる、御職になるのは人物がよく、金錢に綺麗な者といへば、或る財力も必要であつた。

町火消は悉く町々に所屬してゐた持場の建築の地形、足代、道路の修繕、溝渠の掃除は必然自分の仕事であつた。これは各建築者の財布から出るのと、地

主の支出する町内入費から出るのと二様だが、出入場、旦那場と稱して、年々の益暮に一定の心付を貰ふ、その家の吉凶慶弔にきまつて町内の頭が呼ばれる、年禮のお伴にも、嫁入荷物の宰領にもゆく、花見遊山にも附く、講談や赤本で商家の店先のゴタ〜へ頭が出て来て、片附けやうとして喧嘩の花が咲いたり、途上警護の意味で娘息子のお供に出て變な腕立を見せたりするが、それは確に彼等が當時に持つた役目であつた、その外に町内の迷惑になる悪漢無頼を取押へる役廻りは、彼等の義務でもある。

町人といへば商家に限らない、市街地に住む民衆であるべきはずなのに、町人といへば商人のことである、それは一町を支持する者が地主であつて、地主は財力の豊富な商家が多いからに他ならぬ、巨商豪賈は町内入費を多く出すのみならず、自家へ鳶の者の出入することも餘計だ、町内抱へとはいふものゝ、地主に飼はれて居る消防夫、幡隨院長兵衛のセリフのやうに、『錢金とは中のわ

るい』といひ切れもしまい、よい旦那に最賈されて男を賣る資本に有附くことも珍らしくない、また彼等の氣分を買つて『弱い者なら腰を押し、強い奴なら向ふ面』といふ、一種の俠氣を煽り、妙に因縁を附けた店先の邪魔を追拂ひ、また一身へ降りかゝる暴漢の無禮などを氣味よく片附けさせる、かうした機會に名を知られ、古の町奴と後の顔役とが同じやうに見られもする。

その根本は火事だ、吉宗將軍が町火消を拵へた時に、市中の者が喜んで早速に命令に従つた、江戸三百年の中に、これほど快速に行はれた命令は尠からう、さうして最初は町家の者共が自身に出勤したのを、やがて日雇人足を使ふやうに變革し、更に専任の消防夫を町々で常備することゝなつた、それに些少の支障もなかつた、いふまでもなく持つてゐる財富の多い者ほど、火事の被害が大きいのだ。金を持つた地主等が苦情をいはずに、町内入費を張込む理由は明白だ。その上に個々の關係で消防夫を手なづける、一つ餘計に土藏の戸前を塗つた

けで、火事の被害が何ほど減じ得られるか、それと出入の驚に氣張つて、よい旦那にされる代價と比較にならない分量だ、であるから算盤の玉から彼等を快よく江戸ツ子にする。それを知つて知らずにか、水道の水を産湯に使つて、金の鯨銚を横目に睨んでオギヤアと飛び出したのを誇る。

氣味の好いことは、ガエンに及ばなくても、旦那の御最賈に預りましても、民衆に親しい方から赤い風の煽り出した兄哥大兄哥の元氣を賞玩したい。

家齊將軍が聞惚れた

それはそれとして木遣が江戸の視聽を集めたといふことに就ては、猶考へて見なければならぬ。淺草の雷門の再建があつたのは寛政七年三月で、それが明治元年十二月まであつた雷門なのですが、その建つ時分に地形に出かけて行つたのが、ほ組の鐵次郎、巳之助といふ二人で、この二人は江戸で名人と

家齊將軍が聞惚れた

いはれる木遣師である、と記録されて居ります。もう寛政度には木遣師といふものがあつたことがわかる。殊に人の多く集る雷門の建築などに、かういふ人間が出かけて行けば、江戸中の目も耳もそこに集るのは無論の事でありませう。それから芝の増上寺に、家康公を御祭申した安國殿の御普請があつた時、これは文政三年九月の事でありませうが、その時にうたふ木遣を書付にして出させてゐます。その書付を見ますと、

御祝儀 おひかけきやり 日光きやり 田歌 坂田 地平均手木 小車
 のぞきふし 軽井澤 ならしほぶな 猪毛ぶし 東金 かけ束 きりうぶ
 し ころがね

とある。この時はもうなか／＼數が多くなつてゐたらしうございます。天保九年三月十日に西丸が火事で焼けました。この時の西丸には大御所様で通つてゐた前將軍家齊が居られたので、この火事には無論大名火消も十人火消

も集つたのですが、なか／＼消えませんで、町火消も内廓へ入つて控へて居りました。この時町火消を御廓内へ入れて消防に従事させたのは、御目付三枝左兵衛の英斷であります。水野越前守は、町火消を入れるのは却つて混雜することになるから、やめた方がいゝ、と云つて反對したのですが、三枝は火急の場合、さういふことは云つて居られない、といふので、自身松の生枝を揮つて町火消を指揮した。西丸はたうとう焼けましたが、御切手御門、御裏御門を定火消と共に、一番組、八番組で消しました。大番所、西丸御留守居詰所、御太鼓櫓、これだけは町火消のみで消しました。それですから十二月になつて、一番組、二番組以下に對して、それ／＼褒美を賜はつた。のみならずその後の西丸御普請に就きましても、その邊の意味合があつたものか、一番組、二番組から五百人づゝの鳶の者、並の人足が四百九十人、各町々の名主、町役人附添で毎日出る。最初は土を品川の御殿山から取る筈でありましたが、半頃に中から白骨が出る。

家齊將軍が聞惚れた

たといふので止めになりまして、山里の土を御使ひになつた。それが爲に地形の日取も餘計かゝつて居りますが、この地形に就て、ろ組の者の木遣が江戸第一といふので大變評判になつた。その木遣をうたふ聲が三町四方に達したといひます。毎朝仕事にかゝる前に、御祝儀の『めでた〜の若松様よ』といふのをうたふ。それが家齊公の御耳に入つて、ひどくこれを喜ばれて、無論御内意ではありませんが、そのうちの木遣の上手な者を――御目通りはしないけれども、御聞きになるのに都合のいゝところへ呼んで、木遣をうたはせたといふ話が外間に傳はつて居ります。

西丸火事の殊勳

それから又弘化元年五月十日に本丸が焼けましたが、この火事の時には町奉行の遠山左衛門尉が、西丸の火事の時先例があるといふので、町火消を率

ゐて入り込みまして、一番組、二番組の者は御臺所前の三重櫓、これに梯子をつないで上つた。龍吐水が届かないものですから、この高い三重櫓の上まで、手繰で水を運びましたが、これは遂に焼けました。併しやはり一番組、二番組の力で、汐見櫓、御玄關前の御多門、冠木御門は消し止めた。八番組、十番組は、梅林御門、御太鼓櫓を消し止めた。それから本所、深川の南組、中組、北組、これが御寶藏を消し止めた。その他三番組、五番組、六番組、九番組などといふものも、めい〜消防に力を盡して居ります。それですから翌六月十日には、町奉行鳥居甲斐守から、町火消總人足へ三千貫文の褒美を出した。その時に鳶人足總代として、本石町一丁目にある一番組の伊兵衛外六十三人が出て褒美を頂戴して居ります。この伊兵衛は『い組の伊兵衛』といふので、本丸火事に率先して出て行つた、後々までも大變名高い鳶の者になつたのです。猶この時には、月行事、町役人どもに對しても御褒美を下され、青物町治兵衛外百二

十二人が頂戴に出て居りますが、それよりも先へ鳶人足が御褒美を頂いたといふことが、大變に町鳶を賑かにして居ります。

流行唄の歌ひ手

纏の玩具が出来たのは明和九年二月、行人坂の火事の後だといふことですが、木遣の流行もその頃から烈しくなつて、大御所様の家齊公が喜ばれたといふところから、天保になつて非常に景氣づいたやうに思はれます。流行唄も古いところでは土手節などといふものがあつて、吉原通ひをする武士もうたつた按配ですが、その後の流行唄、殊に明和以後のものは唄ひ手が違つてゐるやうであるし、文句も亦大分違つてゐるらしい。明和から文化まで、随分長く流行してゐた潮來節なども、どうも船頭唄のやうな氣がしてならない。弘化にはやつた伊豫節、安政にはやつたいなせ節、文久にはやつた大津繪の中にある木遣くづ

し、さういふものを見ると、益々唄ひ手の様子が考へられる。文句も大分下品なものになつてゐる。『仇ッぽい』といふ言葉は多く女に用ゐられるが、仇ッぽいといふのは惚ッぽいといふことなので、それは新内の持味のやうに感じる。それと同じやうに、イナセといふのは職人の方で、イサミといふのが鳶の者、といふ風に思はれる。唄の上から眺めて行くと、どうもさうした味ひがある。あだな深川、いなせは神田、人の悪いは飯田町、

といふのがある。

あにきやア内かとおね御に聞けば、あにきア二階できやりの稽古、音頭とるのはアリヤこちの人、

といふのもある。都々一にして見ても、江戸へ來ては唄ひ方が大分變つて來てゐるやうに思はれる。天保以後の流行唄を集めて見たことがありますが、わづか集めただけでも、大分流行唄と唄ひ手との關係が知れるやうな氣がする。そ

れらがかくくに唄ひ方といひ、文句といひ、木遣の影響を受けてゐるものゝやうに眺められるのであります。

歌澤に見たところが、笹丸は旗本の隠居だといひますし、芝金は御家人だといひますが、寅右衛門は疊屋、辻音は『は組』の頭です。それだから『オヤすかねえ明けの鐘』といふ文句が、大變い、文句のやうになつてゐる。總じて唄ひ物は引下げられて居りますが、わけても流行唄は下品なものになつてゐる。それが明治になりました、學問によつて、その氣品を引上げようとする。芝居の活歴なども、さうした意味から起つたのであります。隨分無理でも、それを押切らうとした。けれども檜舞臺などといふものは、一般の人を相手にしたものではない。そこへ行けば流行唄の方が遙に一般的である。流行唄から眺めて行くと、江戸ツ子の氣分は殆ど行渡つたかと思はれるが、實はやつぱり格別なもので、いづれの階級にも共通してゐるとは云ひきれない。どうも御座敷が違つ

てゐるやうな氣がする。ペランメエと、ペランメエを面白がつてゐるものとは大變違ふ。假令興味に熱狂して、心持はその中の人であるやうになつて行つても、やつぱり見物人であることは無くならないのであらうと思ひます。のみならず江戸の末には——否、それよりも早かつたでせう、博徒といふものは已に一般から別なものになつて居ります。次いで景氣のよかつた鳶の者は、將に別なものにならうとするところで江戸がおしまひになつた。もつと江戸が續いたら、鳶の者はどんな恰好になつたか知れませんが、必ず一般と立別れるものになつたらうと思はれる。

主従關係と雇傭關係

一體享保以來、貨幣の天下になつてしまつたのみならず、昔の主従關係といふものが無くなつて、追々に雇傭關係に移り、皆が日雇取にならうとしてゐ

る。本来封建の世界としては、土地の無い者に家來のある筈は無い。それが續いて居つたから、譜代の家來ばかりだつたのですが、戦國時代に入りまして、この主従關係が動搖して來た。新しく興つた英雄は勢ひ新に人を抱へなければならぬやうになり、一方では又主取をしなければならなくなつた。徳川氏になりましては、明かに譜代の家來でもいゝし、新參の家來でもいゝといふ役向がある。それを二半場と申して居りました。戦國時代に在つては特に二半場といふものを別けて居りませんが、事實の二半場はあつたらうと思ふ。徳川氏は明かに二半場を認めましたけれども、それでも大體は譜代であつて、抱入は少いのですから、とにかく昔ながらの姿を保つてゐた。武士が窮迫して參りましたので、だん／＼臨時抱へ入が多くなり、不斷は大勢の人を持つてゐないことになつた。愈々窮して來た享保度からは、中間も若黨も皆日雇といふ風になつてしまつたのであります。

商家の方は元來土地が無いのですから、家來といふものは無い。たゞ僅に所領を失つた武士の歸商しました者が譜代の家來を持つてゐたに過ぎません。ですから一般に於ては初から雇傭關係だつたらうと思ふ。元文度になつて、文字金が出るやうになりましたは、武家と町家とが對立して居りましたが、だんだんと金權が武權を壊して來て、武士は町人に頭が上らないやうになる。そこで職人等は何方へつくかといふと、これは町家について居りました。武士と町人との間には、對峙する氣味がありました。職人と商人は如何にも密著な關係がありましたから、その間には問題が起らなかつた。且商人には自由競争といふやうなことは無いので、問屋、仲買、小賣と立別れて、各得意先取引先を持つて居りまして、仕入れ賣先が大體固定して居りましたから、波風無しに暮せらる。それと提携してゐる職人も、同様な有様であまり動搖を受けないわけでありませぬ。

貨幣といふものは殖えて来れば来るほど片寄りするのが當り前で、貨幣の天下になるにつれて、だん／＼と町人の世の中になつて来る。西鶴は『天下の町人』と書いてゐるけれども、貨幣の方から眺めると、もうあれから間もなく、天下の町人でなしに、町人の天下でありました。これは武家のものした物を町人が取つたので、武士を押へつけた働きは慥に町人に在る。そこで武士は農民と利害を同じうしてゐるところから、これと結びついて商人に對抗しようとしたのですが、結局武士が取残されて敗滅に歸し、農民があとに残ることになつたのであります。それならば商人と農民はどうかといふと、これは米を中にしつて常に對峙して居りました。とにかく武士は農民を保護することもあるし、又虐げることもあるもので、農民の方では必ずしもこれを身方にするとは云へないのですが、相手によつては身方になることが出来た。といふうちにも農村には、産業のある農村と、純粹の農村とが出来て居ります。元文の頃から關東の方で

目立つたことを申せば、機業を始めた農村といふものは、何れも景氣がよかつた。それも最初は農間の仕事だつたのですが、家庭工業の姿からだん／＼機械工業の體裁になつて来た。さうしますと農民であつて、その生産したものを賣らなければならぬ。生産するのは工の方であるし、賣捌いて行かうとすれば商の方になる。農は已に商と工とに手を延して參ります。農商の對抗は農が工の領分に浸入し、更に商の疆域を犯して販賣に従事しやうとする、それを資金作で、品物と買ひ手との間に商人が割込んで直接の取引をさせなかつた、若しこれが勢力を得ようとして團結したならば、最も力強いものが出来たでせうけれども、どうも商人のやうな風に行きません。何分大きな團結が出来ない、資金關係からも、領主の違ふ方からも妨げられる、領分が違へばツイ隣り村でも、甚しい隔りになるので、封建制度は領分／＼で一々打切つてあるのです、それに農本主義で、百姓の商賣をするのを嫌ふ、これは武士どもが妨げた爲であ

りませう。此等のものが江戸時代に姿の變つたところを見せなかつたのは、江戸ツ子が遂に勢力を得なかつたのと同じ事で、江戸が短かつた爲であらうと思ひます、斯う考へると決して今日が偶然ではありません。

幾度もする間食

挿畫でも江戸ツ子の風采はいくらか見えるだらうと思ひますが、更に見立繪の讀賣と、合巻の挿畫になつてゐる讀賣とを、こゝに對照して出して置きませう。見くらべれば文句は入らなからうと思ふ。又それほど見立繪といふものが實際と懸隔して居るものであり、見物人はこれほどに美しく見ようとしたらしくもある。勇み商人といふやうな、見事なものにするには骨が折れるが、實物を離れて想像の上に、さういふものを持出すといふことは出来なくなからう。江戸ツ子なるものを今日では、よほどいゝものゝやうに思つてゐる人があるが、

あの三尺帯の姿、やぎうを拵へてゐる様などは、あんまりいゝものでないのみならず、それと話をして見たところで、纏まつた話が出来てもなし、一語々々としても詛があつて聴取りにくいものでもあり、實物をまのあたり見れば、大概の人は厭になつてしまふでせう。やつぱり想像によつて、實物を離れて、勝手次第の思はくで、その思はくを樂しむといふやうなのが一番よささうに思はれる。正直に云へば如何にもつまらない、つまらな過ぎたほどのものでありました。

さてそのつまらなかつたものゝ影響は、見物人が想像する幻覺とでもいふのか、さういふものによつて大分いゝ大きな影響を與へて居るのであります。が、それよりも江戸ツ子自身が正直正銘に與へてゐる影響はどんなものであつたか。それに就て先づ江戸の食物を調べて見る。勿論彼等の食物で、江戸の上下に通じた食物といふことではない。彼等はいづれも勞働をする身體であり

ますが、殊に鳶の者などになると、小屋が軽くないといけないと云つて、うんと物を食ふことは無い。鳶の者でなくつても、大工にしろ、左官にしろ、或は棒手振にしても、駕籠舁にして見ても、相當に身體を烈しく使ふものですから



を喰ふ、度々に喰ふのだから彼等はいづれも小食であつて、極めて飲食の量が少いから、従つて三度きめたものだけでは腹が減つて来る。大飯食ひは田舎者

見ない。明治になつても車夫は度々に喰ふ、一度に喰つては動けないと云つた、さうして食撰みをする、身體が續かないと云つて、錢を惜まずに榮養價の多いもの

だとして、彼等は輕蔑して居つた。田舎の人も三食の外にもものを喰ふ。十分食つてもまだ腹が減るのでありますが、田舎者の労働とは又違つた労働をしてゐる彼等は、元來が一人前ほどの食事をしてゐないので、是非間食をする必要



賣讀の計居久戸江

濟む。腹が減つてゐるといつても、食撰みをする事が出來た。さういふ邊から、ちよつと食つてうまいものがある。然もそれはあまり高いものではなかつた。勿論間食にしても、その分量は多いものでないから、比較して見れば安い

間食ではなかつたかも知れません。

町料理惣菜料理

一體江戸の料理といふものは、四條とか、大草とかいふやうな庖丁家の料理ではない。町料理といつて、それとは全く別のものでありますが、これも元祿の末頃から、大名が町の料理人を雇はれるといふやうなこともあつて、庖丁家以外の料理が、そろそろ行はれかけて來ました。それが明和の頃になりまして、洲崎の榎屋をはじめ、いろ／＼と料理屋が出來て參りました。榎屋などの料理は今日の支那料理のやうに、一卓何程といふ工合だつたやうです。それから會席料理といふやうなものも出來て來た。これは茶の方から來た名前であります。その料理は必ずしもさうではない。それもまあ一種の料理で、榎屋をはじめめとして前後二十軒餘も開業されたけれども、此等は所謂江戸ツ子の連中とは

係合の無いものである。そのうちに即席料理なんていふのが出來て來た。これは惣菜料理などといふのと似寄つたもので、小料理屋であります。たゞ屋臺骨が小さいばかりではない。もともからある大茶屋といふものは、料理を命じても直には出來ない。料理を拵へて置いて客を待つといふのではないのですから、晝の料理を朝命じる。乃至明日の分を今日命じるといふ風で、それで濟して來たのに、榎屋などのやうないゝ料理屋が出來て、そこでは料理の支度をして置いて客を待つ、客を見れば直ぐ出す、といふ仕方になつてゐる。それをうつして行つたので、お客が來れば直ぐ料理が出る、これが即席料理なのです。今日で見れば、五時間も一日も料理を待つなんていふことをする者は無いが、一方には大茶屋のやうなのがあるのですから、昔の江戸としては、即席料理といふことを斷る必要もあつたのであります。

屋臺店と繩暖簾

それからこのいゝ料理屋が出来た頃、即ち明和度に於ては、飲食物の辻賣が大分はじまつた。屋臺店が出来た。茶漬店といふものも、だん／＼ひろがつて来る。蕎麥屋が料理屋風になる。鮓屋が出来て来る。居酒屋も出来れば飯屋も出来る。居酒屋と飯屋と一緒にたやうな繩暖簾といふものも出来て来た。この辻賣や屋臺店のものが江戸ツ子に關係があり、江戸ツ子の影響を受けたものである。一體江戸は寶永の頃までは、街道の立場より外には飯を食ふやうなところが無かつた。それですから享保の半頃までは、丸ノ内から淺草の觀音まで行く間に、晝食をするのに困つた。淺草まで行けば何かあるのだけれども、その途中に何も食物を賣つてゐなかつたのです。それが寶曆前後になりますと中橋廣小路の南側の方へ、餅と田樂と煮染を賣る家が五六軒出来た。江戸の入



(畫挿の計居久戸江)店臺屋

口である品川、然も五街道の第一である東海道の最初の驛である品川、そこでものを食ふか飲むかするより外には、それまでの間にはもう何も無い。それから今川小路の北の方に、蕎麥を賣る家が二三軒出来た。その外には江戸中何處にも蕎麥を賣つてゐるところが無い。山の手や淺草へ行く道にも無いといふ有様であつた。僅に寛延、延享度になつて、室町、本町の邊のところに二三軒食物屋が出

来た位のものである。尤もそれより前、元禄十六年の地震火事の時に、焼跡で田樂を賣つて居つた。それが一串三文づつであつたさうですが、地震火事の擧句で皆が食物に困つてゐた時だから、随分歴々の士まで、それを食つたらしい。又その翌年の饑饉には、江戸の端々に煮賣店が出来た。此等が煮賣店の早いところだつたのでせう。この時分でも居酒屋といふものはまだ無かつた。居酒屋が出来たのは、これからよほどおくれたものと見えまして、寛政度には煮賣酒屋がなか／＼商内が盛にある、といふことが書いてある。居酒屋ではないが、鎌倉河岸の豊嶋屋、これは寶暦度から一杯酒を賣つた。さうしてその愛敬に田樂を賣る。これは後々まであります。立つてゐて樹の隈からぐつと引かけるやつで、『アフツキリ』といひ、『グイノミ』、又は『ズイノミ』などといつて居りました。それから芋酒屋、これは田舎風のものでありますが、享保十五年の八月頃、風邪引の呪ひに芋酒を飲むとよろしい、といつてはやつたことが

ある。芋酒といふのはどんなものかといふと、薯蕷の白いのを卸して、よく搗つて、冷酒に入れて搔廻しながら飲むやつで、これはその後にはやつて居りましたが、又一方には芋で酒を飲む、ごく古風なことも起つて來た。向嶋の麥斗庵だとか、葛西太郎だとか、戎宮だとかいふのは、麥飯に芋の煮ッころばしで一杯飲むといふやうな好みがあつて、これも一種の芋酒屋なのです。併し江戸市中には、道中筋の立場によくある居酒屋、ちよつと腰をかけて飲むやつと、芋を肴に酒を飲むといふやつとが混じて、名前はやつぱり芋酒屋といふものが後々まで出来て居りました。

それに寛政以後のところ、『炊出』といつて、見附々々へ詰める諸大名の家來達の食事を引受けるものがある。それから飯屋といつて勤番士の獨身者の爲に、諸侯の長屋へ辨當を運ぶ。又この飯屋へは飯を食ひに行く町家の者もあるといふわけで、さういふものがだん／＼と出来て來た。居酒屋といへば酒、

飯屋といへば飯なただけれども、それもこれもごつちやにして、酒も飲めれば飯も食へる、といったやうなものが出来て来た。それが縄暖簾を掛けてゐたから縄暖簾といふ名で呼ばれて居りました。明いた醤油樽を土間へ竝べ、その上に板を渡して、それへ腰を掛けて皆土足のまゝで飲食する。御菜は皿盛、飯も一杯々々出すやつで、皆一皿いくら、一杯いくらといふことになつてゐる。俗に之を『ヤター』といつて居りましたが、『ヤタ』といふのは豆腐のこと、豆腐を岡部といふので、岡部六彌太から来た洒落です。ヤタで一杯遣るところから『ヤター』といつた。さういふやうな按配式でありましたが、そのうちにはなかなか氣の利いたやつがゐて、親仁橋のなん八といふ家では何でも一皿八文、一食大概二十四文位で濟んだ。三分亭といふのもあつて、三分を銚にすれば卅二文になる。かういふ今日の食堂に似通つたのがあつた。安くつて用の足りるところです。

安賣番附の食品

天保八年三月に出しました『安賣番附』といふもの、これは相撲の番附に擬してあるのですが、東の方に擧げてある食物屋だけ擧げて見ますと、

- 六間堀下の橋阿倍川
- 萬町笹岡の茶漬
- 四ツ目橋の濁酒
- 麻布の百疋屋團子
- 京橋山崎居酒屋
- 本芝の栗餅
- 新堀の赤羽團子
- 板橋の剛めし

安賣番附の食品

といふやうなものがある。それから西の方には、

鎌倉河岸豊島屋の酒

人形町の源氏茶漬

室町の甘飯

三田春日下の二六

三枚橋の石焼茶漬

數寄屋河岸の淡雪

品川の甘飯

日本橋の麥飯

鍛冶町の汁粉——四十五文

下谷の川村蕎麥

八丁堀の甘飯

といふやうなものがある。此等は値段が安いばかりではなく、分量も多いので
評判になつてゐたのですが、天保の改革には食物一品十五文以上に賣ることを
禁ずることになつてゐましたから、こゝに擧げてある食物の大部分はいけない。
三分亭も江戸勘定にすれば、金一兩銀六十匁、錢にして六貫五百文、一匁は百
八文だから、一品三十二文強に當るから駄目なことになるのです。

天保改革後の事にして見ると『江戸久居計』といふ合巻がある。この本は文久
度のものだが其の中に擧げたものを見ると、青物町の讚岐屋、これは腰を掛け
ても、上つても何方でもいゝやうな家です。それから親父橋の芋酒屋、葺屋町
の田舎汁粉、田所町の廣野屋の天ぷら、これは屋臺店で立食をするやうになつ
てゐる。それよりも前に屋臺店の天ぷらは、兩國の廣小路に出て居りました。
天ぷらで家名が通るやうになつたのは天保以後でせう、田所町の泥鱒屋さかい
や、傳馬町の鱒屋、これは立場居酒屋といふ宿驛のものと同じ體裁でありました。

同じ町の居酒屋りきう、裏通りの尾張屋、これは穴子を専ら食はせる店ですが表通へ出ると柳川があつた。これは鱧一式の店です。馬喰町にも穴子を食はせる千年屋があつた。米澤町には五色餅があつたし、羽衣煎餅なども有名なものです。向兩國の淡ゆき、地内の甘酒屋、金龍山餅、馬道まで行つて正直蕎麥、土手の松葉屋の汁粉、此等はいづれも安くつてちよつと食へるものでありました。縄暖簾で濁酒を賣る家がありますが、この濁酒を賣ることも寛政の頃から盛になつて來たので、洒落者は上酒の中へ濁酒を入れて賞翫した。米の飯を食つてゐながら麥飯を食ふのと同じで、安いから飲むといふのを跨いで、乙だといふやうな心持もある。濁酒の事を『中汲』とも申して居りました。

茶漬屋は上等食堂

それから前にもありましたが、茶漬といふものゝ進歩です。これは明和の頃

に淺草並木に街道茶漬といつて、十二文づゝで賣つてゐたのがあり、それが寛政度になると、江戸市中に六七十軒も出來ました。なか／＼茶漬店が盛になつて參りました、文政には茶漬にも上等なのが出來て、七十二文位取るのもあつた。淡雪八文、平がついて十二文なんていふ茶漬店もあつた。この茶漬屋では酒を出しません。東京になりましても、宇治の里は分店が澤山あつて、随分盛でありましたが、そこでは酒を土瓶へ入れて持つて來るといふことをして居りました。

それから鱧、骨拔鱧は文政の初に本所大川端石原町の鰻屋で始めたともいひ、南傳馬町三丁目の裏店の萬屋が始めたとも聞きよしたが、骨拔の鱧鍋を柳川といふことは、横山町新道に柳川といふ鱧店があつて、そこがはやつてから柳川といふ名になつたらしい。その頃には一鍋——一人前が三百文づつだつたさうで、随分高くなつてゐます。鱧汁は葺屋町川岸の堺屋で天保頃に始まより、

茶漬屋は上等食堂

次いで龍閑橋際にも數寄屋橋の側にも出來た。鯨汁も、その頃から出來たのですが、いづれも一杯十六文といふので賣始めたやうです。

鰻井の發明

鰻も蒲焼になりますと、少し錢のある者でなければ食へません。たゞ辻焼の鰻といふやつは、そんな事なしに安く食へるけれども、これは蒸したのでも何でもない、まづくて仕方の無いものである。江戸ツ子連中の爲に食ひいゝやうな鰻、價の安い鰻は鰻飯だ。相當な鰻屋へ井を食ひに行くと、二階へ上げないで、店先に腰掛けて食はしたものです。このはじまりは文化年中に堺町の芝居の金主であつた大久保今助、この今助が鰻が好でありましたが、小屋へ來てゐては食ひに行かれないから、自分で工夫して、炊たての飯の中へ鰻を入れて持つて來させる。さうして飯と一緒に食つてしまふことにした。かういふこ

とを今助が考へない前は、豆腐の殻を煎つて熱くして、重箱へ入れたのを持つたして遣つて、その中へ蒲焼を入れて來る。これもやはりさめない爲だつたのですが、今助の方は豆腐殻から出して拂ふ世話も無し、暖い飯と一緒に食つてしまへるのですから、誰彼なしに賞翫するやうになつた。値段は今助の時には百文に極めて置いたのですが、後には百四五十文から二百文となり、慶應になりましては三百文から四百文位までしたさうです。さうなると器も多少吟味する、割箸もつける。といふことになつて來る。割箸といふものは文政以來のものださうであります。

蕎麥屋の繁昌

次に江戸の者が蕎麥をよく食ふこと、畢竟は安いからです、それは他のどの都會にもないほどだと思ひます。それですから市中を歩けば、大概な町には蕎

蕎麦屋がある。蕎麦は元來甲州から江戸へ入つて來たものだといひますが、随分古くから擔ひ賣をしてゐたものと見えて、寛文元年十二月に、夜町中を荷賣をしてはならぬ、といふ禁令が出てゐます。それから更に寛文十年七月になつて、暮六ツ以後に荷賣をしてはならぬといふことになり、貞享三年十一月には、餛飩蕎麦切の荷賣は火を持つて歩くものだからならぬ、といつて禁じてゐるのを見るとき、随分古くからあつたに相違無い。値段は古いところでは、蒸蕎麦で一杯六七文位でありました。今日でも蕎麦を蒸籠へ入れて持つて來る。『もり』といへば蒸籠に載つてゐるにきまつてゐる。冷たい蕎麦を蒸籠に載せて來るのもをかした話であるが、これは蒸蕎麦の形が残つてゐるのです。それを知らなから與謝野晶子さんが國から出たてに、あの上へ汁をぶつけてしまつて困つたなんていふ御愛敬もある。

享保の中頃になりますと、蕎麦店が江戸の方々に出來た。神田橋の邊では蕎

麦を餛飩を入れる桶へ入れて持つて來る。後には膳までも箱へ入れて持つて來るやうになつた。これを『二八郎座けんどん』といつて居ります。この『郎座』といふ言葉は、前に料理のところでも云つたのと同じ事です。又『けんどん蕎麦』『御膳蕎麦』に就ては、寛文度に吉原で始めたといふ説もありますが、市内では小傳馬町二丁目に半兵衛といふ者があつて、これが博奕宿であるところから毎日毎晩蕎麦を取る。その度に不便であるからといつて、井から膳からすべと取揃へて、小さい箱へ入れて蕎麦屋へ渡して置いて、云付けてやれば、それへ入れて持つて來るといふことにした。それを見て牢屋の表門前の太田次郎左衛門といふ者が工夫して、一人前づゝ道具を箱へ入れたのを拵へて賣出した。大變これが喜ばれて市中にひろまつたのですが、それから一八、二八、三八などといふことになつて、中味の代金よりも入れ物の方が三四十倍もするやうな蕎麦屋道具、それを皆使ふやうになつた、といふ云傳へがある。これは延享、寛延

度どの話はなしで、蕎麥屋そばやの道具だうぐが綺麗きれいになつたのは此頃このころかららしい。それまでは蕎麥屋そばやとは云いはない、やはり上方かみがたと同じやうに、饅頭屋まんぢやだつたらしいのですが、寶曆ほうれきあたりから蕎麥屋そばやといふやうになつたのです。

一體蕎麥たいそばは皿盛さらもりにするのが丁寧ていねいなので、井いにするのが略りやくした方ほうであつたさうです。皿盛さらもりの風ふうは天保度てんぽうどまで残のこつて居をりました。今日こんにちで見みると、芝居しばるへ行いつた時ときに、更科さらしなの店みせでは皿盛さらもりにして蕎麥そばを持つて來くる。何なんだか變へんなやうな氣きがするけれども、元來ぐわんらいはあの方が本當ほんたうらしい。それから少し前まへのところになると、大平おほひらに盛もつて來くる。ですから古いところは、蒸蕎麥むしそばは蒸籠せいろうに載のせるし、さもないのは饅頭桶まんぢおけへ入いれて來くる。それが大平盛おほひらもりになり、皿盛さらもりになり、井いとなつて、また蒸むさない蕎麥そばをも、見みて呉くれのいゝやうに蒸籠せいろうへ盛もる、といふことになつたものらしい。『ぶつかけ』といふのが今日の『かけ』ですが、この『ぶつかけ』といふ言葉ことばは、明和頃めいわころのところにくらゝも使つかはれてゐます。或あるひはもう少し古ふるく

からあるかも知しれません。『道外百人一首だうがいひゃくにんいっしゆ』の中なかですから、元文位げんぶんぐらゐだらうと思おもふが、『一八ぶつかけ』といふ言葉ことばがある。『ぶつかけ』は随分古ふるいものと思おもはれます。洒落本しゃれほんの中なかに書かいてあるのは、慥たしか天明位てんめいぐらゐのものと思おもひますが、亭主ていしゆが『かけ』を誂あつらへてゐるのを、女房にようばうが、それは『もり』にした方がいゝ、残のこつたつゆを冷つめたい飯めしにかけて食くはうと思おもふから、といふことを書かいたものがある。『もり』といふ言葉ことばは、何時いつから出來できたかわかりませんが、もう天明てんめいにはあつたに相違さうゐありません。無論むろん『もり』になれば井いぢやない筈はずだし、桶おけでもない筈はずだ。それだから皿盛さらもりり、それから體裁ていさいを造つくつて太平おほひらへ盛もるといふことは、極きはめて便利べんりな法はふで、一番略ばんりやくした仕方しかただといつてゐる人もありま

甘汁は愚痴だ

『もり』といふことになる、どうしてもつゆが入る。このつゆに就ては『三代男』の中に『江戸汁』といふ言葉があります。京町の三浦屋のきてうは蕎麥が好きでしたが、甘汁は愚痴だ、蕎麥を食ふのは江戸汁に限る、と云つた話が傳はつてゐる。このきてうは享保頃の人だが、それより前に『三代男』にあるのを見ると、どの位前からあるのかわかりません。江戸汁といふのは、醤油一合味醂一合を一合に煎じ詰めて、それで食ふのですから、ひどくからいものです。ちよつと蕎麥の先をつけただけで食ふのがよろしい。無論これは『もり』の話で、『かけ』になりますと、とてもそんなからいものでは食べられない。『馬方蕎麥』といひますのは、文化以來、江戸の名物になつてゐますが、四谷御門外の太田屋といふ家で名高かつた。大井で分量も多いのですが、これは『もり』ではない、『かけ』です。つゆがだぶくとあつて、中味もどつさりある。これを馬方蕎麥といふ。甘汁で蕎麥を泳ぐやうにして食へば、馬方蕎麥と同じやうに

なりますから、さうして食ふやつを大變罵つて、あいつは馬方蕎麥が似合ふ、といふやうな事を云つたものです。それはどうだといへば、あんまりつゆが多かつては、蕎麥の匂といふものが無い。蕎麥の匂を賞翫するには、どうしたつて『もり』でなければいけない。『かけ』も『かけ』、種物を食ふなんぞに至つては、蕎麥食ひとしては相手にならぬ話である。それから『笹蕎麥』といつて、蕎麥を笹へ入れて来る。これは水がよくきれのを賞翫した。勿論蒸し蕎麥とは製法が違ふ。明和度には洲崎の笹蕎麥といつて名高いのがありました。蕎麥屋としては淺草の道光菴、これは御寺の中にあるので、寺の同宿に蕎麥の好きなやつがあつて、それが無心すれば誰にも蕎麥を打つて食はせるやうになつた。これは寛延、延享度からなか／＼盛でありまして、蕎麥屋が料理屋じみるやうになつたのは、この道光菴からだらうと思ふ。道光菴に次いで蕎麥屋も澤山出來て居りますが、種物といふことや、料理屋らしくなるには、文化まで

来なければいけませんまい。享和年代に巢鴨の菊が江戸の人気を呼んだ時分に、植木屋半九郎が蕎麥店を開いて繁昌したといふ話がある。これは菊見の客を牽付けるのですから、幾分か體裁作つたものでしたらうが、場所が場所の事でもあり、後の蕎麥屋のやうには行かなかつたらうと思ひます。

江戸の商標を集めた天明年間の出版物に、『七十五日』といふのがあつて、その中に大分蕎麥屋が出てゐる。孰れも相應に繁昌した店らしいが、料理屋らしかつたかどうか、らんめんを看板にしたのが二軒もあり、目黒の紫江庵では御三人詰、南一、是は當時の通言で、南鐮一片のこと、南鐮といふのは二朱銀です、二兩の八分の一のことだ。この紫江庵では御吸物も肴も出した、多分料理屋めかしくなつてゐる。又た紫江庵と茅場町の雪窓庵とは御土産の箱入折詰重詰をも出した、蕎麥屋の庵號は道光庵以來のもので、町の飲食店とは系圖が違ふ、それで天明度には紫江庵、雪窓庵を眞似たのが市中に二三出来ました、それか

ら變遷はありますが段々庵號の蕎麥屋の多くなつて来るばかりです、本所押上の蘭麵、これは今日も残つてゐます。昔から引續いてゐる店では、大方これが一番古い店だらうと思はれる。この家は文政六年の開業で、蘭麵といふのは卵つなぎの蕎麥でせう。玉子つなぎ、芋つなぎなんていふのを、格別に云ひ立て、賣物にしてゐたのが、それを看板になくなつたのは天保以後だと思ひます。一體一八、二八、三八などといふことが、蕎麥と饅頭との配合の加減をいつたものだといふ説がある。けれども芋つなぎ、卵つなぎといふことから考へて見ると、一方には生蕎麥といつて、蕎麥ばかりで拵へるといふことを呼びものにする。それも田舎蕎麥は生蕎麥であるといふことを標榜する爲に、手打蕎麥といふのを名としてさへゐる。若しつなぎに饅頭粉を入れる分量を名稱に現すとしたならば、それだけ蕎麥が悪いことになる。正味の少いことを看板にするやうなもので、これはをかしい。だから昔から、二八といへば十六文、三八とい

へば二十四文といふ風に、蕎麥の代價だと解してゐる。どうもこの方がよさうに思はれる。

種物の代金

さういふ風に文化、文政時分には、つなぎに何を使ふといふことの吟味が嚴重になつて、それこそ蕎麥撰みが盛でありましたが、この吟味と種物とはどういふ關係になるか、文化五年の小石川の蕎麥屋の引札を見ると、

御膳卵切四十八銅

同あく抜二十四銅

同花巻二十四銅

同松の尾十六銅

同新蕎麥長生三十二銅

同太平しつぶく二十四銅

同翁ぶつかけ十六銅

と書いてある。文といつてよさうなところを『銅』とひねくつて居り、一々『御膳』と斷つてある。無論これは卵切が一番最初にありますが、この家では芋切も拵へたんでせう。この體裁で料理屋じみてゐたことが考へられる。今ではどんなものだか知ることが困難なのもありますが、小石川あたりでも斯うした蕎麥屋があつたといふことはこれでわかります。

奢りに往く風習

それから蕎麥粉は『引拔』といつて色が白くなりましたのは、寛政元年の秋からで、それまでは蕎麥といふものは、少し黄色味を帯びたものと思つてゐたのです。此等のものは、江戸ツ子なんていふ連中が食ふには少し錢が高い。け

れども毎月二度や三度は物食ひに出るといふやうな風習を持つてゐた江戸ツ子は、奢りに行くと稱して、随分五十文、七十文の蕎麥を食つたらうと思はれる。安い二八や三八の方はいふまでも無い。その時分の勞銀としては、三百か四百しか取れませんが、火事があつた、嵐があつたといふやうな事があれば、日雇取連中は二倍、三倍、甚しきは五倍も七倍もの賃銀を取つた。それです。火事があつたり、嵐があつたりした後では、幕府はきまつて賃銀値上の禁令を出して居ります。江戸ツ子連中は、時たま、どうかして餘分な錢でも取れば、直に何か食つてしまふ。自宅では喰へないものを喰ひに出掛ける。奢りに往く風習は彼の日常を存分に説明してゐます。或は又下駄のいゝのを穿く。手拭に錢をかける、といふ風があつた。これは何としても、さうひどく金のかゝるものではないが、手綺麗なものを選択。手拭と下駄にだけ贅澤をするといふことは出来易い氣儘だからしたのである。ですから江戸の下駄とか、手拭とか、三尺

とか、食物の方でいへば蕎麥とか、鮓とかいふ類のものには、割合にいゝものがあり、高いものがあつて、それが又彼等を得意にしたといふことは、いくらかも證據のある話です。

鮓は元日勿々から賣りに来る。これは彼等の間食に最も便利なものだ。鮓の話は已に云つて置きましたが、安宅の松の鮓などは非常に高い。兩國の與兵衛も高い。一つ三匁も五匁もする高い鮓があつたのだから、こいつは少し困る。竈河岸の毛拔鮓、笹巻になつてゐる、あれが十六文、深川横櫓の小松鮓、これは『ちらし』も五目もあつて、井が百五十文位した。この邊のところならば、江戸ツ子にも食へないことはない。江戸ではどの町にも鮓屋が一二軒、蕎麥屋はその半分位の割合であつた、といふことを書いたものがある。今日ではさうでもありませんが、江戸時代には蕎麥屋の倍數位鮓屋があつたと見える。小鮓の鮓などは早くから賞翫されてゐましたし、堺町の金高鮓、それから

弘化になつて十軒店の篠田鮓、これは油揚げの鮓で、『お稻荷さん』といふやつだ。これがなかく賣れたし、又乙なのがあつた。最も憫然なのが天保七八年後に出来た焼鮓といふやつ、これは鯉の腹へおからを詰めて焼いたのです。こいつは随分難品だが、中にはそんなのもあつた。

一體鮓といふものは、寶曆頃までは料理屋へ誂へて拵へさせるので、振賣は無かつた按配であります。寶曆の頃に和州の中市から、釣瓶鮓が出店を出した。それから一遍に早鮓になつたらしい。それまでは數日漬けた古鮓だつたのです。今日ある江戸風の當座鮓は、延寶年間に幕府の醫官である松本善甫といふ人が始めた事と傳へられてゐるけれども、それは何程信用してゐるものかわかりません。文化以前のところでは、日本橋の笹巻鮓と、小石川諏訪町に桑名屋といふ家があつた。市内には此二軒の外に鮓屋といふものは無かつた、ともいつてゐます。鮓が盛になつたのは、江戸ツ子が威張り出した以後の話です。そ

れを助けたものは、往來の屋臺店で食物を賣る事ですが、これは天明の饑饉から始まつたことで、それがだん／＼に油揚げから焼肴、もち菓子唐菓子一夜鮓といふ風に、屋臺店の賣物の種類が殖えて參りまして、それが爲に鮓の立食が始まつた。文久二年の大津繪を見ますと、随分飛んでもない事を云つてゐるが、又賣物の種目がどんなものであるかわかりますから、こゝへ擧げて置きます。いちぢきたな、立食しよ、夜店は煮屋焼團子、天ぶらのあげたは、これや何だ、あれや何だ、値はいくら、蛤剥身の貝のはしら、穴子にこはだにするめいか、座がしらは海老である、やきいもぼた餅はじけ豆、すし麥飯、あんかけおでんにかん酒、あんばいよし夜鷹そば、

金鰐やら大福餅

それから菓子です。これも干菓子、蒸菓子、餅菓子、駄菓子、いろいろあり

ますけれども、江戸ツ子の爲に發達したかと思ふのは餅菓子であります。文化
 文政の際に民間の食物のよくなつたことは著しい、又その賣行のいゝことも
 無類であつたと、明治の初めに老輩が回顧感嘆してゐます。享保の頃にあつた
 餅菓子は、糝粉と焼餅と二種だけでありました。米饅頭や助惣焼、幾世餅など
 といふものは、それよりも前からあつたのですが、享保十四五年の頃になりま
 して、例の象が日本に渡來しました時、餡をどつさり入れた象饅頭といふのが
 出來ました。これらが低い階級の人達に向けられたものであります。羊羹など
 は蒸菓子の上等なものでありまして、元文の頃から低級な人達が食ひはしたけ
 れども、どうも價が高いからうまく行かない。元文の頃から賣弘めてゐました
 ものは、淺草餅、大佛餅、朝日餅、外郎餅、山椒餅などといふ類で、櫻餅は文
 政から始まつて居ります。それから牡丹餅がこの時分から、大分辻賣に出るや
 うになつた。それよりも有力なのは、文化の末に腹太餅に代つて大福餅が出て

來たことです。尤も賣出した最初は寛政度の事でありませう。腹太餅をもつと
 丁寧ていねいに拵こしらへて、餡あんの入いりをよくしたのが大福餅なので、腹太餅は中高ですが、大
 福餅は平たい。さうして大きいものですから、腹の減つた時などには工合ぐあひがい
 ゝ。焼やいて置おけば暖あたいし、冬の夜などに食くふには最もいゝ、といつて喜よろこばれ
 た。それから前にありました小麥焼こむぎやき、今川焼いまがはやき、丁字焼ちやうじやき、阿倍川餅あべがはもち、柏餅かしはもち、かう
 いふ類たぐひのものは皆大福餅に壓おされた形で、もう文化以後のところでは、延享度
 からあつた金鰐焼きんづばやきと、大福餅と、この二つが一番の利きけ者ものだつたやうでありま
 す。

紅梅焼こうばいやきなどは安政二年から始まつてゐる。砂糖餅さとうもち、蕨餅わらびもちなどといふやうな新
 しいものも、そのあとで出て來た。後には焼饅頭やきまんぢうの串刺くしざし、揚饅頭あげまんぢうなんていふも
 のも出て來た。それと飯倉片町のおかめ團子だんご、黒船町の喜八團子だんご、北新川の一
 石餅こくろもち、芝神明の桃太郎團子ももたろうだんごなんていふ團子類だんごるゑ、それも醬油しやうゆをつけて焼やいたので

なしに、黄粉をつけたり、餡をつけたりした、いろいろな團子が出て来た。これは一串いくらでなしに、一盆いくらなので、十六文、二十四文なんていふ値段で賣買して居りました。

江戸ツ子の影響といふか、刺激を受けたといふか、さういふことで出て来た食物はいろいろありますが、重立つたものに就て申して見ると、先づ／＼こんなものである。此等によつて江戸ツ子の生活状況や、人柄を考へる資料にならぬこともあるまいと考へます。

鐵炮玉に蜜豆

二三年前に斯ういふ話をしたことがあります、繰返すやうになる處もありませうが、其の話の筆記を爰へ出して置かう、一體此の見解から前後左右に考へ廻つたものが、本書になつたやうなものですから。

江戸ツ子の話といふのでありますが、先づ江戸ツ子とはどういふものであるか、といふことから申上げたい。江戸ツ子といふこと、これは江戸子ではないので、どうしてもツの字が中に割込んでゐないと工合が悪い。東京ツ子でもない。雞が鳴くやうに聞えるからいけないのぢやないので、江戸を背負つて生れた若い者、といふ意味にならないからです。大分御年配の方もおいでのやうですから、申上げるまでもないかも知れませんが、明治のはじまりにはトウキヨウとは申さないで、トウケイと申しました。これは古い小説や假名のついた古い新聞——昔は少しましな新聞には假名がついてゐない、今日でいふ大衆向なものではないと假名がついて居りませんが、さういふものを御覽になれば皆トウケイと書いてあります。私などの先輩で、大分世話にもなりました饗庭篁村、この人の書いたものには、よほど後までトウケイと書いてあります。篁村翁だけではありません、あの頃の人は大概トウケイと書きもし、云ひもし

たのです、一人や二人でなく世間が、さういつたのです。これはどういふわけ
 でさうなつたか、この心持はどういふものかと申しますと、西京と竝ぶのが厭
 だつたのです。西京がもとから向うにありまして、サイキヨウといふところか
 ら、此方はわざとトウケイといつた。彼方ではケイトとは申しません。其のキ
 ヨウを嫌つて、ケイと申しました、西キヨウに東キヨウでなく、西キヨウに東
 ケイといふ、キヨウトといふ。かういふ僅な名稱の上の毛嫌ひも全く昔咄に
 なりまして、今日はトウキヨウでもトウケイでも、そんなことは字引に任して
 置けばいゝ、といふ時勢になつて居ります。このわづか一字だけで考へまして
 も江戸ッ子も東京ッ子も無くなつてしまつた時に、ふりかへつて江戸ッ子とは
 どんなものであるか、といふことを尋ねるのは、實に容易ならん搜しものだと
 いはなければなりません。

その搜しものゝ緒口がどんなところにあるかと申しますと、今日の女の子達
 が使つてゐる言葉の中から見つけ得られるやうに思ひます。明治に女學校が出
 來まして、女の子に本らしい本を讀ませることを始めましたのは、何と申して
 も跡見花蹊さんでせうが、この跡見といふお婆さんは公家の青侍の子供であ
 ります。この人が東京に於て新しく女の教育をはじめた、その御利益の最も顯
 著なものは、女の子の名前に子をつける。キナ子にアン子にウン子といつたや
 うな調子で、遂には藝者の名にまで子をつけるやうになつた。これはどういふ
 ことかと申しますと、公家の方ではどんなをかきな女の子でも、又は身分の低
 い者でも皆子をつける。それからはじまつた話で、これがさういふ風にひろが
 つたのであります。それまで武家では何女、町家でも女は妻であると娘である
 とを問はず、皆何女と書いて來てゐる。その中へ持つて來て、新しい教育を授
 ける女學校が、キナ子、アン子の流儀で、東京を構ひつけないで、どしどし西
 京風を振廻した。その御蔭を蒙りましたから、末派末流の女學校からは飛んで

もないものが出て来る。人の女房であれば誰でも奥さんで、豆腐屋の奥さん、洗濯屋の奥さん、車屋の奥さんといふ風に、誰でも構はず奥さんにしてしまつた。その癖亭主の方は殿様ぢやない。昔は奥様といはれるほどの人の亭主は、必ず殿様に限つたもので、たゞ一つこれに外れてゐたのは八丁堀だけです。八丁堀の與力は妻女のことを奥様といひ、亭主のことを旦那様といつて居りました。それが今日では片端から奥さんになつてしまつたんだから、恐ろしく女權が擴張されたわけだ。ですから、女房が亭主のことを何といつていゝかわからない。『宿』といふのもあれば、『手前ども』といふのもあり、名字をいふものもある。さういふ風に、身分も職業もわからないやうにたゞき壊して來た、その中に一つ面白いものが残つて居ります。それは女の言葉の『だわよ』といふやつで、これを大人がいふんだから、私などにはびつくりものですが、それが實は江戸の名残で、西京や中國九州あたりには無い言葉なのであります。

それではこれは江戸のどういふ場所にあつた言葉かといふと、そんな詮義などはしない。キナ子、アン子流だから、生れ場所や、意味や、調子合などを考へることは少しもない。御年配の方は無論御存じでせうが、これは裏店の女の子に限つた言葉であります。元來は『さうだわ』といふのと、『いゝよ』といふのとは別だつたが、近頃は『わ』と『よ』とが、負さつて一緒になつてゐる。その言葉がどうしてそんなにひろがつたかといひますと、かういふ裏店で育つた娘が下地ツ子に出て、大きくなつても子供らしく見られたい心持から、かういふ言葉を使ふ。それがペン／＼の連中にひろがつて來た。ところへ持つて來てキナ子やアン子の連中は、昔のことなどは知りませんから、パク／＼と鵜呑にして用ゐる。それが女學生間にひろがり、女學生が大きくなつて、主婦となり母となつても、依然として『わよ』をきめ込んでゐる、といふ有様であります。嘗て私どもが幼年の頃には、口にしたことの無かつた蜜豆などといふものが、

お品ぶつて方々に賣られてゐる。相當なお方がそれを食べて平氣で居られる、といふやうになつてから、もう二十年近くなつたらうと思ひます。さうすると近頃は又菓子屋の方でも、黒砂糖を盛に用ゐて、黒光羊羹なんでものまで拵へてゐる。黒砂糖がうまいかどうか、そんなことは考へない。以前は漬つたらしの、じやんじやら髪の子供等が、よく鐵炮玉といつて眞黒な玉をしやぶつてゐたものです。今のキャラメルみたいなわけだが、一文菓子屋といつて、一文持つて行つて買つて來る。明治になつてからの話ですから、それより前はもつと安かつたでせう。或は豆ネヂといつて、犬の糞の固まつたやうな菓子がある。さういふものに黒砂糖が使つてあつた。そんなことで舌の下劣になつてゐる人間どもが、その昔を忘れずに黒砂糖を珍重する。そこでとんでもないことになつて、化物の羊羹がお座敷へ出るやうになる。こんな手合は、駿河屋の羊羹なんぞ喰つたつてわかりやしない。舌も口も下劣になつてゐるから、うまいものを

を食ふことがむづかしくなつた。

こゝでそんなことを申したら、或は劍突を食ふかも知れませんが、牛鍋より外にうまいものは無いやうに心得てゐる人がある。一體鍋へ直に箸を突込んで食ふなどといふのは、下司な話でお話にならない。鍋などといふものは以下物といつて、武家でも町人でも、主人の前へは出さない筈のものである。私なども實は蛤鍋を食ひおぼえましたが、あれもヤターといつて、繩暖廉の中で、片足を持上げて、醬油樽の上へ渡した板に腰掛けて食ふもので、旦那とか殿様とかいふ人は知らないものです。その穴を行く牛鍋なんぞを喜んで、これよりうまいものが無いと思ふやうでは、食物の話はとも出來ない。それから又鮪の鮪を途方もなく難有がつて、それを食はなけれや江戸ツ子でないやうに思つてゐる。一夜鮪といふものさへ、上等な食物でないのに、鮪でありながら醋の氣の無いものを食ふといふのは不合理な話だ。この鮪の鮪といふものは、天保三

年二三月に、江戸の近海で鮪が非常に澤山取れたことがある。一本二百文位だつたといひます。鮪ですから、一本といへば随分大きい。それが二百文位でも使ひ道が無いので肥料にするといつて方々へ送り出した。その時如才ないやつがあつて、身を殺いで鮪の鮨を拵へた。何しろ値段が安い。刺身を食ふ心持からいふと、安くもあるし、見たところも綺麗だから皆が食つたので、其はじめはといへば、一番安い食物だつたのです。然るに近頃はテツカ卷などといふものまで拵へて、鮪のどつさりついてゐるほど氣が利いてゐるやうに、近來の江戸がりは心得てゐる。天保の時、鮪が馬鹿に安かつたからはじまつたものだ、なんてことは夢にも御存じない。鮨は醤油をつけて食ふべきものかどうか、そんなことも知らない。蕎麥の食ひ方だつて知らない。どんなのが馬方蕎麥で、どんなのがいゝ蕎麥か、そんなことも辨へない。あのツユのだぶくゝあるやつが馬方なんで、江戸汁といつて辛いやつに、ちよつと先だけつけてスル〜と

食ふ。尤もスル〜と食はうと思つたつて、近頃の蕎麥は團子みたいだから、食ひきらなければ食へないやうな始末だ。それでも蕎麥さへ食へば江戸ツ子らしい顔をしてゐる。

裏店住居の人々

これは今日の人達がさうであるばかりぢやありません。本當の江戸ツ子もさういふものを食つてゐたので、あまり通人がつて行き過ぎるのも困つたものですが、江戸ツ子連中の食物にも、うまいなんてものは無い。變なものを食つてゐたのです。第一この人達といふものは、表通には住んでゐない。皆裏通に住んでゐたので、これを裏店と申しました。裏店といふ言葉も今日ではわかりにくくなつて居りますから、御年寄の方々には御免蒙りまして、ちよつと申して置きます。長屋と裏店とは差別がありまして、長屋といふのは建てつらねた

家ですから、どんな場所にもあつた。水戸様の百間長屋などといふのは、今の砲兵工廠のところにあつたので、その他大名衆の本邸には、圍ひのやうにお長屋といふものがあつて、そこに勤番士も居れば、定府の者も居りました。長屋の方は建て方から來てゐる名稱ですが、裏店の方は位置から來てゐる名稱なので、御存じの方も澤山おありだらうと思ひます。木戸がありまして、兩側にズーツと建つてゐる。この節だと随分小言の出さうなものです。裏店といふのは商賣の出來ない場所、こゝに例の熊さん八さん、落語の中に罷り出る代物が陣取つてゐる。この人達のお嬢さんが、前申した『わよ』の先生なので、熊さん八さんとはいふけれども、實は熊五郎だか、熊吉だか、八太郎だか、八三郎だか、そんなことはわからない。手習をしたことも無いし、名前も書けないといふ程度の人物で、よく落語家が、大家といへば親も同然、店子といへば子も同然、といひますが、この大家が今日で申せば差配人です。その頃の言葉では

家主と申しました。眞面目な書類などには、何町誰店の誰といふ風に書いてあります。これは店借人なのです。今日は借家人にもいゝ人がありますけれども、昔の借家人は多く裏店で、家賃は日掛で拂ふなんていふ連中がゐる。家主といふのは地主の使用人で、町の役をつとめますから、町役人でもありません。地主は自分が町用をしなければならぬところを、使用人の家主にやらせるのでこの家主なるものは、落語とは振つても振りきれない間柄ですが、店子どもに對しては非常な勢力を持つて居りました。地主はその町の旦那様で、今日でも地面を持つて、そこに住んで居られる方は、實際力んでもござるでせうが、昔はなか／＼そんなものぢやない。この地主が威張つたことだけしやべつても、三十分やそこらは大丈夫かゝるだらうと思ひます。こゝで町人といふ言葉から考へますと、武家の住つてゐる屋敷地に居らぬ人市街地に住んでゐる人をすべて云ひさうなものなのに、町人といへば商人に限

るやうになつてゐるのはどういふわけか。これは都會の自治制の單位が一町々々になつて居りまして、町の萬端は地面を持つたものだけにする。地面を持つにはそれだけの資力のある人でなければなりませんから、自然と錢のある商人が權利を得て、錢のない、地面のないものは、そこから除外されることになる。従つて町人といへば商人のことになつて、町内費用の相談などといふ時にも、第一が地主寄合、その次が町内寄合——これは地面を借りて家作をした人——といふ風になつて居ります。とにかくすべての町内費用は表店の人が出すので裏店の人は何も出すわけぢやない。八さんや熊さんはどういふ負擔をするかといふと、釣瓶錢とか、鍵錢とかいふやうなものです。鍵は木戸口の鍵で、これは滅多に壞れるものぢやありませんが、釣瓶が壞れたとか、繩を替へるとか、さういふ費用を出す。井戸替は皆で申合つてやるから、その費用は無い。お祭で揃の浴衣を拵へるなんていつても、買ふ買はないは御勝手次第だから差支な

い。地主がお祭に赤飯を炊いて祝ふと、皆やつて来て、たゞ飲んだり食つたりして、いゝお祭をする。若い者の中に入つてゐるやつは、更に集め錢をして、翌日飲む錢まで、地主さんのお世話になる。かういふことは弊害もあるには相



(畫挿の相二十三)みさいの化文

違ありませんが、或方面から見ると面白いところもある。この地主と店子に就ても、かなりお話があります。とにかく錢のあるものが、錢の無いものに錢を振り撒いてやるといふことは、世の中をよくする方のことだから、まあ結構な話です。さうやつてお世話になりながら、べらんめえで威張るやうな店子も、昔だつて無かつたわけぢやない。だから私も弊害を認めないわけではないが、こんなことはあつ

た方が面白いといふのです。

さういふわけでありまして、この裏店の連中は町内入用さへ出さない。今日
でいへば地方税とか、市町村税とか、そんなものも無い。さういふところに居
るのはどういふ人達かといふと、日用取、土方、大工左官などの手間取、棒手
振、そんな手合で、大工左官でも棟梁といはれるやうな人、鳶の者でも頭にな
つた人は、小商人のゐる横町とか、新道とかいふところに住んで居りますから
裏店住居ではない。この新道や横町に住んでゐる手合が、江戸ツ子の音頭を取
るので、裏店の江戸ツ子の頭分に當るのです。さういふ連中は、知識の上から
申しまでも、資力の上から申しまでも、有力者でないのはわかりきつた話
で、その江戸ツ子なるものが、八百八町の人の心持を代表するやうに考へられ
て來たのは、よほど不思議なことなのです。

寛政時代の労働者

それではこの江戸ツ子といふ言葉は何時頃からいふやうになつたかと申しま
すと、寛政七年に出ました洒落本の『廓通莊子』といふものにあるのが、一番古
いやうです。或はもう少し古いのがあるかも知れませんが、私の見たものでは
これが一番古い。江戸者といふ言葉はもつと古くからありますが、どうも
江戸者では何だか不景氣で、江戸ツ子といふやうなわけに參りません。尤も寛
政以來ズーツと江戸ツ子といつてゐるわけでもないで、爲永春水の書きまし
たもの、これは天保度であります。これには東ツ子といつて居ります。東ツ
子でも引立たない。元祿頃にいつた『吾妻男に京女郎』といふやうな氣持にな
つて、何だか間が抜けてゐる。そこでとにかく寛政以來、江戸ツ子といふ言葉
が浮いて出て居りますが、この江戸ツ子といふ言葉は氣が利いてゐるやうに、

『おらア江戸ツ子だ』と、自稱するものゝ多くなつたのは、文化以來のことです。この模様を書きましたものは、『飛鳥川』といふ隨筆の中に、近來は棒手振の肴賣や野菜賣が馬鹿に力み出して威張つてゐるが、それがよつほどをかしい、といふことが書いてある。その他のものにもつと長く書いてあるものもありませんが、いづれにも何の代表者でもない江戸ツ子が、獨力味で威張つてゐるけれども、誰も相手にするものは無い。いさみとか、きほひとかいふ風な様子をして、今にも喧嘩でもしさうな様體に見える。どうしてそんな馬鹿な調子が出るやうになつたかといふと、今日の言葉で申せば、自由労働者の増加から斯ういふ勢を生じたのであります。武家も町家も奉公人の割合がだん／＼悪くなつてゐる。これは権力の固定といひますか、或は凝結とか、凝塊とか申したらよろしいか、とにかく固まつて動かない。資本も同様でありましたから腕前を振つて給金を取るものがむづかしくなつた。つまり割が悪くなつたので

番頭は番頭、下男は下男といふ風に、給金が凍てついてしまつた。その上に武家も町人も算盤づく、勝手づくで、續いて永年に人を使ふといふことがなくなりました、一時雇が多くなつた。世祿世襲である君臣の關係、一生奉公といふ主従關係が衰へて參りまして、そこから開放された人間が日々に多くなる。これが自由労働者の増加したわけでありましたが、この變徴によりまして、元文の頃から彼方へ雇はれ此方に雇はれして、一定の主人を持つてゐない。江戸中の白壁は皆旦那だ、といふやうなやつが多くなつた。さうなりましたから、武家の方にも人入れといふものが發達して來ますし、町家の方では桂庵がだんだん盛になつて、いゝ商賣になるやうになつて來た。それから又町火消、昔は手子のものとか、鳶の者とかいつて居りましたが、町火消といふものが出來て、各町内に火消人足があるやうになつた。つまり一町々に抱へるので、誰が抱へるといふんぢやない、町で抱へるのです。これも今までの君臣主従の關係か

らいへばよほど自由なわけでありませう。この町火消は數も多うございましたし各町内の入用のうちでは一番多いものでありましたので、今日の町村の有様で申せば、先づ學校入用に當りませう。もつと大きい例で申したら、軍事費位に相當する譯のもので、且減らすことの困難なものであります。この多くの人間を引續いて使つて行く。町火消の如きものは、町についてゐて一定の主人を持たぬ形式を取つて居りますが、この連中は各町に鳶の頭といふものがありまして、大きい店などになりませうと、それが店附といつてきまつた出入先としてゐる。纏とか梯子とかいふ役付の連中にも、それく出入先があつて、旦那の年禮に皮羽織を著てお供をするとか、湯治場へお供して行くとかいふやうなことをやる。店の混雑する時には取締をしたりすることもある。鳶の末派末流になりませうと、町内の棟上から泥溝の掃除までするので、かういふ場合に決して他町から人を入れない。町内中で保護するやうになるのです。さうやつてゐる

るうちに、派手な旦那の最辰を受けて、餘計に金の貰へるやうなやつが男を賣り出して、講釋の種になるやうなことをする。これらはその當時には、出入場がいゝからといはれてゐたらしうございます。大工左官も一面からいへば自由であります、やはり出入先は持つてゐる。それから江戸の市街が次第に開けて參りました、裏店が殖えた結果、棒手振が商賣になるやうになつて來た。鹽とか、菜とか、大根とか、八百屋ではない、一品賣の商賣です。かういふ連中が江戸ツ子として、最も得意で威張つて居つた。

通貨膨脹のお蔭

文化文政と申しますと、大御所様といはれた家齊將軍、江戸の黄金時代であるやうに、後からは考へられる時であります、この時水野出羽守といふ、馬鹿に如才ない、滑つこい政治家が出て來まして、貨幣の改鑄をやりました。文

政二年に小判が改鑄されて、草文小判といひ、一步判も同じく改鑄されて、草文歩判と稱されて居ります。文政三年には丁銀も改められ、十一年には又二朱銀も改められました。いつでも徳川時代に鳴らした將軍、綱吉に致しましたも吉宗に致しましたも、又家齊に致しましたも、皆この通貨改鑄をやつて居ります。さうして改鑄のたんびに通貨は悪くなつて居りますが、一時は通貨膨脹といふことで景氣が立つのであります。家齊が近來で贅澤な、羽振のいゝ將軍だつたといふことも、實はこの通貨膨脹の爲なので、この點は綱吉と同じことです。通貨が膨脹すれば、あとは悪くつても、一時だけは效能がある。その景氣のいゝところへ乗掛けたから、江戸ツ子連中が頭を持上げることになつたので、夜さへ明ければ金が取れる、金は身體にある、といふやうな考が起つて來た。この頃は交通が不便でもありませんし、各藩に各々制度がありまして出稼人を出すことをしませんから、江戸が景氣がいゝからといつて、労働者を

吸収するやうなことは無い。殖へない人數の上に景氣がよくなるのですから、今のやうな思想が起るのも尤もなのです。まだその上に江戸名物の火事、これが頻繁にありました。『火事は江戸の花』といふのもこの頃の言葉で、近來では大分皆から小言をいはれてゐるやうですが、江戸ツ子と稱する連中の爲には、火事は結構なものだつたのです。昔は金持が焼け出されると、今日のやうに火災保険などといふものはありませんし、全く箸も持たないことになるのですが江戸ツ子のスツテンテン先生の方は、家作は人のものだし、ろくな道具は無いし、身體だけ逃げればいゝんだから、火事の被害はこはくない。その上火事があれば勞銀は高くなるので、江戸の花であつたかどうかわかりませんが、慥に江戸ツ子の花ではあつたに相違無い。だから明日の心配も要らなかつたし、宵越の錢は持たないといふ氣持にもなれたのですが、その裏をもう一つ考へて見ますと、まことに氣の毒なもので、彼等はいくら骨を折つたところで、依頼す

るに足るだけの資力を集めることは出来ない。假に集め得たにしても火事で焼ければそれまでのものである。宵越の錢を持たないといふことは、持てない方からも來てゐる。幸にそれでも飢ゑない、凍えないから、錢の無い方を自慢にする。財布に何も無いのを、『流れ川で尿を洗つたやうだ』なんていふ、怪しからん言葉を作り出すことにもなるのであります。

江戸ツ子といふものは淺慮で、向う見ずで、喧譁ツ早い。たゞそれで他のものに比べると、どこからも羈絆されることが少いから、それが嬉しかつた。この私どもが見ては甚だつまらない江戸ツ子を、ものにしたのは芝居です。芝居だと江戸ツ子が如何にも活躍する。彼等が得意の痰火を切るといふことも、芝居で聞けば面白いが、實際の江戸ツ子にはあれだけの辯舌はありません。それはよく落語の中に残つてゐて、皆さんが寄席へ行つてお笑ひなさる道具になつてゐるのでも知れて居ります。『金のしやつちよこを横眼に睨んで、水道の水を

産湯に浴び、おがみづきの米を喰て、日本橋の真中で育つた金箔付の江戸ツ子だ』といふやうな、氣の利いたらしい臺詞は、實際彼等に云へやしない。皆狂言作者がさういふ風に拵へて役者に云はせるのです。滅法界な惡對趣味、妙な言葉ですが、あの惡對も芝居の方で申すツラネの中にあるので、やはり芝居で吹聴したものです。明曆以前は知らぬこと、金の鯨鉾なんていふものは、江戸中どこを捜したつて見られやしない。名古屋へ行かなければありやしません。その頃は自動車も無かつたし、自轉車も無かつたから、いくらか暢氣ではありましたが、日本橋の真中で子供が育つなんてことは思ひもよらない。こんなことを彼等は自分で云へやしません。彼等はこんなことを云ひたいんだらう。と狂言作者に想像されるやうな様子をしてゐた馬鹿者である。さういふものを芝居が何で取つたかといひますと、小田原町といふものが芝居町のいゝ御華主なので、それに附合つてしたものだらうと私は思つて居ります。

周囲からの見物人

それとはうつて替つて小説——滑稽本などを讀んで見ると江戸ツ子がさんざんに書かれてゐる。膝栗毛、浮世床、浮世風呂、八笑人、七戀人といふやうなものに出て来る江戸ツ子のざまがどんなものか。又どうしてさういふ小説は江戸ツ子の悪口を書いたかといふと、江戸ツ子といふのは前申したやうな手合です。すから、本を讀むなんていふことが無い。いくら悪く書いても大丈夫だから、遠慮なく書いてのけたのです。小説でも讀む人達は、多少錢のある人達です。自分と世界の違つた連中が、とんでもないことをするのを面白がつて見る、今日江戸ツ子を面白がるのも同じことで、江戸ツ子といふものが無くなつた後になればなるほど、さういふ眼で見ることになります。諸君も御自分の境涯に御ひきくらべになつて江戸ツ子といふものを面白いと思はれるかも知れません。

が、愈々本當の江戸ツ子がやつて來たら、多分諸君は逃げ出されるでせう。『あんなやつは困るから、留守だといへ』位なことを云はれるかも知れない。その心持が小説の上によく現れて居ります。いくらもある本ですから、お若い方はおひまな時に御覽になれば、江戸ツ子の様子がよくおわかりになるだらうと思ひます。江戸ツ子に對して感心するのも、面白がるのも、皆この小説の讀者の階級の人で、『自分達と違ふ連中が面白いことをするな』といつて見てゐる。遠國他國の人は、江戸にはそんな人間があるか、といつて面白く眺める。よく見れば厭になるが、ちよつと見ると面白い。つまり小説だから面白いのです。近頃の文士でも身邊小説といひますか、いろ／＼自分の周囲のことを材料にして書く。あれも小説だと氣が利いたやうに見えるけれども、當人のやつたことを見ると、さう面白くもなさうだ。徳田君だとか、近松君だとかの書いてゐるものも、小説だから面白く讀めるが、實際だつたら困るでせう。あの心持が當

代で江戸ツ子を鑑賞した心持、後世からふり返つて江戸ツ子に感心する心持に通じてゐるやうに思ひます。

もう一つ明かに江戸ツ子を語つてゐるものは半纏著といふ言葉です。半纏著では吉原へ行つても上げない。江戸ツ子といふと、意氣で氣前がよくつて、どこへ行つてももてさうに思はれるが、半纏著だと、錢を持つてゐても女郎さへ買へないんだからひどいものです。この連中は普通の人の著物を長著といふ。羽織は見たこともない手合だから、長著は持つてゐない。持つてゐるのは半纏股引だけだ。もし長著があるとすれば單物に三尺位のものでせう。

この他言語の訛なんかに就て申上げて居りますと、そればかりでも大分の時間になりますから、今日はお預り申すことにしまして。まはり中で變なことをする江戸ツ子を眺めて居つたとすれば、その數はあまり多くつてはいけない。一體江戸ツ子はどの位居つたかといひますと、さう多くはなかつた。大概江戸

の人口の一割位で、その他に斑——交雜したものが三割、それからあとが他地方から來てゐる人で、これが六割、こんな割合になつて居ります。江戸の人口と申しますと、武家や坊主は除けられて居りましたから、町奉行の支配に屬する町家だけで、五十萬人と見積られて居りました。その一割なら五萬人で、大づもりで五萬人といふことになるわけですが、江戸ツ子は三代かゝるといひます。父母が江戸生れの人で、他國生れの人を交へずに三代續かなければいけないといふ、馬鹿に系圖をひろげ込んだものです。尤も親の代からこの大家さんだとか、この地主さんには幾代御厄介になつてゐるといふやうな、江戸ツ子の貧乏やけたのがありましたから、随分三代以上のも居りましたらう。武家の方で申せば、先祖は三河からお供して來た連中が澤山あつて、江戸ツ子の方では『萬歳の國から出て來やがった三ピン』がと思つたでせうが、これは大概組屋敷内の貫ひ引き、さもないにしろ、他の階級と通婚しないのが多いから、先

祖は三河出にしろ、幕末まで来ないうちに、もう六七代はたつてゐる。が、ごく少々の祿しか貰つてゐない、二十俵乃至十俵、二人扶持、一人扶持といふやうな家でも、江戸ツ子といふことは申しません。資格はあつたかも知れませんが、云はなかつたのです。町家でも一軒の御主人は勿論、番頭や小僧に至るまで、江戸ツ子だなんていつてゝは商内が出来ない。眞面目に三代たつた人がありましても、これは江戸ツ子の中へ入らない。それです。江戸の戸籍の上で交りの無い江戸ツ子が一割あつても、かういふ人達は除けなければならぬのです。

それに文化文政の江戸はひろがつて居りました。江戸といふ名稱は下町のととで、下町といふのは城下町の意味ですから、千代田城の前どころ、新橋から筋違見附まで——筋違見附といふのは、今日では少し曲つて居りますが、先づ萬世橋のところ——が江戸で、その外は江戸ぢやない。芝へ行けば芝ッ

子、外神田なら外神田ツ子で、浅草だの、本所深川は無論江戸ぢやない、場違ひの方です。又江戸前といふ言葉があつて、よく手ばしつこいやうなことにいひますが、この江戸前といふのはどこかといふと、兩國から永代までの間、お城の前面をいふのであります。文化文政の江戸には本所深川も入つて居りましたが、かういふ場違ひの江戸ツ子を差引まして、本場物ばかりですと、先づ二萬五千位の數にしかならない。二萬五千の熊さん八さん、べらんめえの手合は全江戸五十萬の人達にとつて、丁度いゝ見物でありましたらう。如何にも見物気分、テニハの合はない連中を見るのに工合がよかつたらうと思ひます。

氣の毒な暮し向

ところでこの手合の生活はといふと、一日に三匁乃至五匁がいゝ手間なので雨降風間を引ぎますから、一箇月に二十五六日しか働けません。一匁と申しま

すと、江戸では百八文に計算します。上方は銀相場でいろく違ふのですが、江戸では百八文ときめてしまつてありました。この収入はどの位になりますか御ひまの時に御勘定を願ひたいと思ひます。この先生達が初鯉を食ふといひますけれども、初鯉は二朱、時には一分もしますから、算盤をはじいて見れば容易に口へ入らない。そこで著物を質に置くとか、家財道具を賣るとかして、それで食ふ。明日金が入るといふ見込のある時分にはそれも出来た。少くとも文化文政から天保のはじめあたりまでは、どうせ初鯉といつたつて、一本買ふわけぢやありませんから、買つて食へたわけでありませう。

前にも申した通り、江戸ツ子といふものは、江戸では誰も相手にするものがないだけに、田舎者が来ると威しつける。こゝだといふわけで氣前を見せる。氣前を見せるには錢が入ります。そこで先づ自分の身のまはり、手拭の新しいの、足袋の新しいの、禪の新しいの、下駄の新しいのといふ風に氣をつける、

これは皆あまり高いものぢやありません。禪なんぞはいくら新しくつたつて知れたものです。足袋も今日の福助足袋のやうに安いものは無いが、さう高いものではない。丁度今日の學校を出た若い人達が、何とか運動をして職にありつくと、急に金縁眼鏡をかけて金時計を下げる、といふやうな心持で、足袋や禪の新しいのを自慢にする。かういふ意味に於て、今の學生上りのひよいくした人達の様子を見てゐると、私には甚だ意味深長に見える。江戸ツ子の種はなかく盡きません。そこへ田舎から出て来た人が、つぎの當つた足袋を穿いて、番茶色になつた禪でも締めてゐやうもんなら堪らない。さんざつばら悪くいふ。殊に京阪となると、向うがいゝところだといふことを知つてゐるだけに、目の敵にする風がある。然るに天保の半頃になると、だんく悪口が少なくなつて、上方の人のものいひは優しい、といふやうなことを云ひ出した。これは錢の實入の少くなつた爲で、足袋や禪の新しいのも買へなくなつたから

さうなつたのです。これが天保の改革の難有味で、江戸ツ子は前のやうな勢が無くなつた。それでもまだ安政の頃までは江戸ツ子の玉子の青二才が途中で夕立に出逢ふと、草履でも足袋でも脱ぎすてにしたもので、話といへば女の噂切見世の評判や稽古所入を得意にしてゐたのが、もう慶應になりますと、さうは行かない。雨が降つて來ても、草履は腰へ挟んで、足袋は懐へ入れる。脱ぎすてなんぞはしない。前には悪くいつた上方者と同じことになつてしまつた。稽古所入の話などもしません。年が明けたらどうしようとか、女房はどんなのを貰つたら世帯向がよからうとかいふことになつて、痰火も切れなくなつた。さういふ風になりましたから、だんく本所深川の方へ屏息してしまつて、今度は江戸ツ子とはどんなものか、考へて見なければならんやうなことに立到りました。

先づざつとこんなことだけかいつまんだところで、江戸ツ子と稱するべらん

めえの兄イ達も、その時々^{ときどき}の經濟事情^{けいざいじじやう}が生み出して^だくれた愛敬者^{あいけつもの}であることを皆^{みな}さんにお考^{かんが}へ願^{ねが}ひたいと思^{おも}ひます。

ざまア見ろ

昔^{むかし}の話^{はなし}は嘘^{うそ}だと思^{おも}はれるやうな事^{こと}が多いので、建勳神社^{けんくんじんじや}と祭^{まつ}られてゐる織田^{おだ}信長^{のぶなが}の若い時^{とき}に、天子^{てんし}様^{さま}といふものを知らなかつた。王^{わう}といふのは人間^{にんげん}だらうか、厨子^{くし}の中^{なか}にでも入^いれてあるものだらうか、と云^いつて尋^{たづ}ねたといふ話^{はなし}が残^{のこ}つてゐる。それが後^{のち}には勤王^{きんのう}の功^{こう}を賞^{しょう}されるほどの武將^{ぶしやう}になつた。それは戦國^{せんごく}の末^{すえ}の話^{はなし}でありますが、尼崎城主^{あまがさきじやうしゆ}で四萬八千石^{せんごく}の青山大膳^{あややまだいせん}亮^{りやう}幸利^{しゆんり}、その人^{ひと}の若い時^{とき}といひますから、大方^{おほはかた}寛永^{くわんえい}位^いだらうと思^{おも}ひます。この人^{ひと}がやつぱり天子^{てんし}といふことを知らない。朝廷^{てうてい}の事^{こと}をいつでも、『王左衛門^{わうざゑもん}々々々』と云^いつて話^{はなし}してゐた。それがあとで天照皇太神宮^{てんしやうくわうたいじんぐう}の眞直^{まっすく}の御筋目^{おんすぢめ}だと云^いつて聞^きかされて、

それでは神様なのか、と云つて仰天した話がある。寛文二年に出版した『爲愚痴物語』にも、王といふのは如何にも短い苗字である、せめて王左衛門か王ひやうゑといつたらよからう、と云つて話したことが書いてあります。江戸時代になつて、だん／＼學問といふことを弘めても参り、學者も道春以來大分出て来たのでありますが、それでもまだこんな按配でありました。

ですから文化文政になりまして江戸ツ子が、女房といへば道伴のやうに思ひ、伯父伯母といへば親の兄弟であることを知らないのも、あんまり無理な事ではあるまいと思ふ。それほどものゝわからない江戸ツ子が、友達の附合、御長屋の附合を缺けば、それが不義理であるといふことは知つてゐた。借金して尻の始末のつかない時に駈落をする。この心持も、借金が片付かなければそこへ顔向けが出来ない。面目ないから駈落するのである。踏倒すといふ心持の外に、面目無いといふことは知つてゐた。不義理な事をするほど恥かしいことは無い

と思つてゐる。これは理窟のあることでもなければ、學問しなければわからな
いことでもない。自然と彼等は恥といふことを知つてゐたのです。外聞が悪い
といふことが何よりの彼等の道徳であつた。そこで彼等は盛に自己批評をする。
『ざまア見ろ』といふ言葉は立派な、自己批評であつて、人の失敗したのを傍觀
して云ふ言葉ではない。自分が成功しても失敗しても、自分の姿を見よといふ
のだ。さういふ心持はどうして起るかといふと、彼等は世間が狭い。向三軒兩
鄰とか、若しくは現在住つてゐる町とか、さういふところを一の世界にしてゐ
る。みつともない、外聞が悪いといふのは、ごく側の人達に對してだから、十
分に見えもするし、聞えもするといふことが多い。見えをするのもそこから來
る。自分のする事は見透されるやうに、誰の目からも外れられぬやうに考へる。
それほどに自分の世界を小さくしてゐるのは、交通が不便で遠くへ出られない
爲もあるが、自分のゐるところにすつかりと嵌り込んで、そこを動かすに濟む

からでもありました。實は此の場合、江戸といつても、ちツと大き過ぎる位なのだが、とにかく江戸といふものを居所とする。さうしてそこによく居付いてゐて、これほどいゝところは無いといふ心持も出る。自尊といへば自尊です。江戸といつても江戸全部では大き過ぎる位だから、芝ツ子とか、神田ツ子とか、下町とか、山の手とかいふ風にこまかくちぎつて、その中でいゝ心持になつてゐる。自分を知らない人なんぞは無い程な狭い天地にゐる。皆心易いわけた。それですから旅行するなんていふことは殆ど無い。又しなくつても濟む。上方へでも行くやうな時分には、近所隣ばかりぢやない、親類や友達にも水盃をしてから出かける。伊勢參とか、金毘羅參とかいふことも、なか／＼の大旅行で、いづれ生涯に二度とは無いのだし、それもしない人の方が多し。つい明治の末、否、大正の初でしたらう。自分の知つてゐる江戸ツ子の名残が上方へ行く時に、近所中暇乞をして歩いたといつて、皆で笑つたことがあるが、やつ

ぱりさういふ心持が残つてゐたのです。『井の内の蛙、大海を知らず』なんて悪口を云はれても、仕方が無いことは仕方が無い。そこに自分が工合よくゐられるから、いゝところだと思つてゐる、江戸がいゝところだといふよりも、自分が住ひいゝといふ心持から來てゐるのだが、それを餘所から來た者と比べて、江戸といふところは結構なところ、日本第一のところ、江戸といふものゝ勢力は日本中に及んでゐる。江戸がいゝところだから將軍様も住んでおいでになる。かういふ風に考へてゐる。實は將軍様が居られるから、江戸から出した政令が日本中に及ぶのだが、さうは考へてゐない。

それでは彼等がむやみにいゝところだと考へてゐる、その江戸が何程いゝのか。西澤一鳳は、京、江戸、大坂、これは何といつても三大都會であるから、錢金さへあれば、著物にせよ、食物にせよ、遊び事にせよ、何の不足もあるわけぢやない、たゞ懐にあるべきものが無い時には、三箇津の何處であつても

不足なものが出て来る。といふことを云つてゐる。つまり貨幣の御利益を云つたので、貨幣が無ければ都會もなし、田舎もない。繁華もなければ、邊鄙もない、といふのですが、これも亦一の理窟であるには相違無い。謏ではありませぬ。けれども江戸ツ子は懐にあるべきものは無いのである。貨幣の御利益なんぞは疾くに跨いでゐるが、それでいゝと思つてゐるのであります。

大地に小便の垂流し

さて實際の江戸が何程いゝところかといふことになる、先づ大道です。この道にも市街地と屋敷地とありまして、町家と武家と兩方から勝手に道を拵へて行く。横町が出来、新道が出来。御屋敷づきの片側町、寺についた片側町などといふやうなものもある。さういふものをまぢく拵へて行きますから、道の高低が甚しい。道普請はどうしても町家の方が行届きまします。國道と

いふものも大概民家に沿うてあるやうになつてゐましたから、旁々以て道普請はよく出来る。本町、本石町、あの邊から御堀の際へかけての石垣と、大傳馬町、石町邊の路面と眺めくらべると、六尺から八尺の違ひがありました。上水普請などをする時に、上水の樋は五六尺で本樋があつたものですが、寛政あたりになると、一丈五六尺も掘らなければ本樋まで行かないところがあつた。これは路面をだんく固める爲に、火事がある度に焼土や灰を持つて来て、そこへ積重ねるところから、大變な凸凹が出来て来るわけなのです。それです。道の悪いところ、殊に場末であつて、武家屋敷の近所などになると、實に臍を没するやうな悪い道がある。例の猥褻な踊として傳へられてゐる『紅葉番所』、あれなどが道の悪いことをよく見せてゐます、その場所は池の端七軒町から根津宮永町へ出る町の角のところに、松平備前守の辻番があつて、その辻番の前ところに年中あゝいふ悪い道のところがあつたのです。そんな

ところは何も池の端から根津へ行く道だけには限らない。番町邊にもあれば、本所深川にもあり、山の手にもあつた。これは武家屋敷で普請が届かないから、さういふ風になつてゐるのですが、自體江戸は築立てた地面が多いのと、元來が野原だつたところですから、いづれにしても道などが固まつてゐよう筈はない。家康が馬喰町の追廻し馬場を拵へられた時に、石や砂利を築込んで拵へたといつて自慢されて居るのでもわかる。下町の路面は元祿以來、百年以上も年々一坪に何兩といふ金を築込んで、さうしていゝ道にしたのですから、道路にかゝつてゐる金は大變なものです。道普請をして路面が固つた處でも、土が輕いので直ぐ吹き立ちます。江戸は土風がひどくつて、火事のあるのさへ見分けられない位、土埃があがる、これは昔からの名物ですが、土風といつて別にありません。江戸は空ッ風といつて、天氣さへよければ風の吹かない日が無い。土は乾いてゐて、まるで灰のやうになつてゐるのですから、空一杯

に土埃がひろがつてしまふ。随分長い間丹精していゝ道になつたところもあり、下町は皆いゝ道になつてゐるわけですが、土埃の方はなかくひどい。天保頃になりましたも、これはなかく直らない。そこで『目かつら』といふものを掛ける。ビイドロで拵へたり、紹張にしたりした塵除眼鏡を掛ける。白い足袋なんぞを穿いて出れば、一日で眞黄色になつてしまふ。可上といふ落語家が百眼を掛けて踊を躍つたことがあります。これはたゞ顔を替へるだけのものゝやうに、今の人は考へるかも知れないが、やはり塵除の『目かつら』から來たので、土埃と空ッ風のひどいところから、可上の百眼といふやうな御愛敬も出たのです。さうかと思ふと山の手の方は、天氣が大分續いた時分に、此頃は下駄でなくても山の手へ行けるよ。なんていつた位のものでありました。江戸といふところは、氣候も正しくない、四季といふけれども實は三季で、春がまことに短い。殆ど無いやうなものです。大槻磐溪は『梅櫻桃李一時開』

——仙臺では花といふ花は一遍に開く、といふ詩を作つてゐるが、江戸にしたところが、春のお花見はなかく忙しい。漸く半月ほどの間に春が無くなつてしまふ。さうして又上方で見られないことは雨が横に降る。これはいつも風があるからです。大川の水が氷つたのは寛政度の話で、それから以後には無かつたやうですが、寛政以前には大分あつたことらしい。凍死したものは、その後にもよくあつた。今日から見れば寒さがもつと強かつたのです。

それから江戸の路面といふものは、甚しく穢いもので、糞小便たれ流しといふわけであつた。小便溜を埋めるやうになつたのは、文政度からだといふことになつてゐるけれども、安政になつてもさういふものゝ数は甚だ少いので、依然としてたれ流しの有様でありました。たまに小便溜のあるところへ行くと、たゞタメを埋めただけの話なので、その臭氣があたりに散つて、實に鼻持がならない。便所に對して板圍をせよといふ法令が出たのは、明治五年十月

十四日のことで、それまでは圍も何も無いたゞ樽みたいなものを埋めて、それへ小便をしてゐたといふ始末で、おまけにその数が少いことから、支那の街路も同じやうなものだ。それから大ドブとか、ドブとかいふものがありますが、大ドブには蓋の無いのが多い。さうしてこれが兩方とも、下水の排出が非常に悪い。随分臭氣を放つて穢いものでありました。下水が不完全だから、少し雨が降るとそれが溢れ出る。水はけが悪いから、その爲に濕ける。これだけのものを眺めても、あまりうれしなものぢやありません。

大自慢の水道の水

殊に水の悪いところで、玉川上水、千川上水、白堀上水、神田上水なんていふやうに、いろいろな上水が江戸のはじまりから出來て居りますけれども、なか／＼これだけでは十分でなかつた。それにも拘らず、江戸ツ子はこの水道の

水が恐ろしく自慢で、前にも云つても置きましたが、『一つ荷四文の水道を買つて、米の水かげんに、ひしやくを立つてたく男だ』なんていふわけで、水を買ふのを大變自慢してゐる。上水の水を飲むといふのが自慢なのです。『山歸』の文句にも『あす朝顔のかけながし、そこが江戸ツ子むらさきと、いさみは水によるならん』とある。かういつた風に、上水を産湯に使つたとか、常に飲んでゐるとかいふことが、ひどく江戸の自慢になつてゐる。當時の我が國には江戸ほど大掛りな水道が無かつたのでもありますが、江戸といふ土地が別けても飲料水に乏しくもあつたからです、のみならず將來に持越すべき問題は、水道だと思はれる、昨春江戸に於ける水道と鑿井について、過去の情況を述べ、且つ將來の施設に云ひ及ぼしたことがある、その話は斯うです。

都市の加へる暴虐

近い頃東京の上水は山口の貯水池が出来まして、東村山の貯水池と相俟つて大分多い水量を得られるやうになりました。先づこれで東京の水ぎれと云ふものは心配が無いことになるのかと思ふと、さうではなくて目の先に近郊八十二箇町村を併合する、大東京の計畫もあるのですから、この上にもまだ水道の擴張計畫をしなければならぬことになつて居りまして、江戸川の水を引込むとかいふ計畫を立て、調べて居つたさうであります、それでも適當な計畫が得られないといふので、話はやつぱり、あとへ戻つて、多摩川の上流、西多摩郡の氷川村、古里村——多摩川の水源である、其處から水を取る。さうなれば東村山と山口との兩貯水池によつて得るところの、六七倍のものを得られるといふので、昭和八年度から十箇年計畫で、多摩川の上流から水を取る計畫をして居る。これが出来れば世界最大の水道であるとかいふ話を聞いて居ります。

從來江戸ではいろ／＼水道のあつたこともありますが、多摩川上水が何といつても江戸の給水の大部分をなしてゐたのであります。近いところで村山の貯水池が出来まして以來、多摩川沿岸——これは昔の武藏野の地帯でありますから、いづれも田畑に對する水の供給といふものに乏しいのであります。のみならず飲用水に事を缺く場所が多い。現在に於てさへ從來に比べて水が不自由になつたといふことは、沿岸の人々が云つて居るところであります。若し今よりもつと上流から水を取るやうなことになるになりましたならば、沿岸の水の乏しくなることは、今より何程ひどくなりませうか。殊に旱でも致すやうな年柄にでもなりましたならば、沿岸の諸村に何程の被害、困惑を生ずるでありませうか。最近十年來、羽村で鮎が取れなくなつて、漁民が業を失つて居る位の話ではあるまいと思ひます。新しい計畫によつて、それで東京市民は水ぎれの心配が果して無くなるものと致しましても、多摩川沿岸の人々の水に不足すること

を考へたならば、東京の者さへ不自由が無くば、沿岸の者などはどうでもいゝといふやうなことが許されるかどうか。それにはいろ／＼な例もありますけれども、さし當つて東京の人達が水に不自由しなければ、沿岸の者はどうでも構はないといふ都市の暴虐が許されることか、許されぬことかといふことを云つて置けばいゝと思ひます。

この都市の暴虐は問題として残して置いて、沿岸の住民等に迷惑をかけて、それで果して東京市民が水に不自由が無くなるかどうか、現在の東京市だけは山口、東村山兩貯水池によつて、供給される水量で足りて居るとする。實はこれも決して足りて居るとはいへない。將來の大東京——近く併合する近郊八十二箇町村、それも今後何程人口が増加するか、その増加した人口に對してまでの水量の保障は、多摩川上流から給水をするといふ新案でも、とても出来ないだらうと思ふ。これは將來に大きな問題を残して置くことだと思ひます。

そこで江戸時代に於て、水道がどんな按配であつたか、又鑿井がどんなであつたか、今日は全く鑿井といふものを認めずに、専ら水道によることになつて居りますが、これも亦大に考へて見なければならぬ事柄であらうと思ひます。將來この多摩川上流案のみならず、その他に水が得られる考案もありませうが、いづれにも鑿井を除外して考へることは出来ません。それは人口の殖えて行くことが何の程度で、どれほどにならうかといふ見込がつかない、従つてそれに對する給水量も何程であるかわからないのだから、いづれとも條件をつけて鑿井を利用するやうなことはしても、全く鑿井を省くといふことは、よろしくないやうにばかり考へられる。

八百八町の給水状態

江戸時代の水道の状況を考へて見ると、紀州の醫官某によつて書かれた

『江戸自慢』。之によつて安政度の水道の様子が簡單に見える。『江戸中に井戸はあれど、飲み水は上水を用ゆ』といふので、こゝに玉川上水と神田上水と二つの上水があつて、それからの給水状況が書いてある。さうしてこの上水といふものは、飲料水だけに使つて居つた。吾々どもが知つてまでも、雑水と稱へて、飲料水以外の水は皆鑿井から汲んで來て使つて居つた。鑿井のうちでもなかなかいゝ水の出る分は、無論飲料水にして居りました。今日は上水を雑水にも使へば、撒水にも使ふ。飲料水だけでなく何んにでも使ふ。あんなことをして居るならば、昔はもつと人數が少かつたには相違なかつたけれども、兩水道で供給する水量といふものは、統計が無いから明白にわかりませんが、今日よりも餘程少かつたのですから、とてもどうにもならなかつた。たゞ飲料水に限つて使ふ、といふ節約が行はれてゐたから、辛うじて用を足して來たのです。その引續きでありますから、明治十五年に書いた『空おぼへ』などを見ますと、やは

り神田、玉川の兩上水で、江戸時代のまゝを襲用したのであることが知れます。この時まで——これよりずつと後までとおぼえておますが、江戸時代と同様な状況で給水されて居りました。その給水線路が委しくこゝに擧げてあります。

水筋小日向より小石川内神田一圓、日本橋兩國八丁堀邊、京橋向は御堀端通り、南へすきや町河岸まで通ずる、元吉原に水道尻といふ所有り、是水道の終りなり。

しかし一體江戸の上水といふものは、神田と玉川との二つではなくて、その他に綾瀬川の水を取入れた白堀上水、玉川の分水と石神の三寶寺池の水とを合せた千川上水、まだもう二つほど上水があつたのでありますが、これは享保年間に、幕府が費用を出すのに困つて廢してしまつた。千川上水の方は、明治になつて再興したこともありましたが、それも遂に廢れたやうであります。

元來江戸はよい水が無いのみならず、水に乏しいところで、飲料水にするやうな河川も近所に無い。たゞ僅に多摩川があるだけであります。それだから水道の水といふものは、江戸ツ子が恐ろしく自慢にしたものだ。それが果して自慢すべきものであるかはいかには知りませんが、水が悪い上に乏しい土地柄でありますから、良い水を多く得られる水道といふものは、何程うれいものであつたかわからない。江戸ツ子は何よりも『金の鯨銚を睨んで、水道の水で産湯をつかつた』といふのを得意に云ひます。金の鯨銚の方は江戸城の天守にあつたのですが、明暦の火事で焼けて無くなつてしまつた。それは無くなつても、それまでの話であります。無くてならぬ水道の方は、享保に幕府が費用の節儉から、上水の數を減しましたけれども、神田、玉川の上水だけは、どうしてもやめることが出来ないのみならず、それを東京へまで持越して居ります。今日でも多摩川の水、それに神田上水の有力な水源地であります井ノ頭の

辨天の池の水は、助水として今日も東京の水道に送水されて居ります。

さてこの大自慢の水道は、承應度に出来たものでありまして、御普請奉行の上水方でありました石野遠江守の書いた『上水記』に従ひますと、明和五年に町奉行から、御普請方へ上水工事を受取りました時分の古い書留に、承應元年までは御城内並に城下の町々に上水といふものは無くて、下々の者は所々の水溜り、溜池などの水を汲んで、それを樋に懸けて使つてゐたので、水には實に不自由なものだつたとある。そこで石野は、赤坂の溜池の水を皆が飲んでゐたが、あれなどは溜り水の池の一である。それだから井ノ頭なども、やはり溜り水の池であつたらう、と書いて居りますが、この溜池の方は如何にも溜り水であつたのですが、井ノ頭の方は野水ではありますけれども、湧き出すのであつたのです。

そこで武藏野の時代からの井戸の様子を眺める。戸田茂睡が天和年中に書い

た『紫の一本』の中には、井戸が九つ擧げてある。これも井戸が如何に珍重されたか、といふことを物語るものと思はれます。『江戸名所記』のやうなものにも、やはり井戸のことが書いてある。水に困つた土地だけに、江戸としては古い名所記などから、井戸には注意してゐたと見える。『紫の一本』のは註記が委しいから、姑くこゝに出して置かなくては。

極樂の井、小石川 山清水堀兼の井、牛込

麴町の井、神田、口チサ 龜の井、同上、口チサ 龜井戸、

油の井、芝 山清水策の井、四谷 野中の清水、谷中

この九つの中で、清水——ひとりでに湧く水を井戸にしてゐるものが七つまであります。九つに對する七つ、湧水を多く使つてゐたことが考へられる。このうちには、もう知れなくなつてしまつたものもありますが、明治の初まで残つてゐた古井戸は、小石川の極樂井、鮫橋仲之町の旭の井戸、津守の策の井戸、

市谷船河原町の堀兼の井戸などでありました。これはいづれも湧水でありまして、策の井などは猿頬を投込んであつて、水を汲み出して飲めるといふほど、水が澤山上の方まで出て居りました、井戸を掘るといふことの不十分でありました時代には、湧水が珍重されたに違ひない。況して江戸居廻りのところでは掘つてもいゝ水が得られませんか、どうしても湧水を使ふ理屈になつても来る筈であります。水道が無かつた時代には、この湧水が何程珍重されたかわからない。勿論湧水だけで用が足りるわけではありませんから、井戸は掘らなければならぬ。その古い井戸はどういふ風にして掘つたか、それは文化十二年版の『武藏野話』などにも、古い井戸の繪があります。それに齋藤鶴磯は、二十年前まで、この邊の井戸は『七曲り』といつて、今の井戸とは、殊の外違つてゐる。今はもう無いが、土人が頭の上へ手桶を載せて下まで下りて行つて柄杓で水を汲む、と書いてゐる。これは所澤に近い堀兼村にある堀兼井のことを書いて

たので、もう文化の頃には半分ほど埋めて、釣瓶で汲んでをつたといふことでもあります。これと略々似たやうなものが、今日でも羽村の内の五ノ神村、青梅の停車場の側のところ、半分埋めてある古井戸がありまして、今は釣瓶で汲むやうになつて居りますけれども、それによつて見ると、螺旋状をなしてぐる／＼廻りながら下りて行つたものだといふことがわかる。まだこの他にも、そここゝに堀兼井の名が残つてゐるところもあり、その形状は五ノ神村の井戸のやうに、舊形をよく現してゐるものばかりではありませんが、あゝいふ掘り方が武藏野の一般の鑿井方法だつたやうに思はれます。

堀兼井の兼の字

それですから、まだ江戸のうちにも二つ三つ堀兼井といふ名だけが残つてゐるわけで、『堀兼』といふのは、掘りかねるといふ意味では無論ない。『兼』とい

ふ字も借物で、私などは、これは曲尺のことを『カネジャク』といふ、あの曲の字を書いた方が、よく意義が現れると思ふ。螺旋状をなしてゐるので、曲の手にぐるぐる廻つて掘下げてある、それで『堀兼井』といふのだと思つてゐます。たまに掘つた昔の井戸は、この堀兼井で、それにしたところが大變に手数をかけて、それだけの勞苦をして掘つても、なか／＼良い水を得ることは出来ない。さうでなければ、山清水の流れ出る場所を見つけて、そこから水を取る。さもなければ湧水を待つ。かういふのが古いところの給水方法であります。それですから、昔井戸を掘るのはなか／＼容易なことではない。その容易でない井戸も、掘りさへすれば必ず良水が得られるといふわけではありません。掘るだけの勞苦では、決していゝ水は得られない。それには『雨窓閑話』といふものがあつて、これに昔の人の水を得る苦心が書いてあります。この隨筆は作者も時代も知れません。白川樂翁が書かれたといふ説がありますけれども

これは慥に間違つてゐる。が、時代はどうもその頃のものだと思はれます。それにはこんなことが書いてある。

或殿様の御話しなされるのに、私が家督を相續して、領分の村々を巡檢した時或村の鄙びたあたりへ行つたところが、大さういゝ水の出るといふ評判を聞いて、そこへ寄つてその水を汲んで見るのに、如何にもいゝ水であつた。その時に傍へ六十餘の婆さんが來て御時宜をしてゐる。それからこの婆さんと呼んで、この水は大さう良い水だが、この村方ではこの水を使つて居るのか、といつて聞いた。さうするとその婆さんが申すのに、左様でございます、この邊の民家は二百軒ほどございますが、皆この水を使つて居ります、それにつきまして御話がございます、この村方と申すのは、まことに水の悪いところでございまして、私の親父がそれをひどく歎息いたしましたして、どうか村方の者に良い水を與へたい。といふことを若い時から心願を立てまして、薬師様に願掛をして

彼方此方と方々に井戸を掘りました、前後八十箇所も掘りましたらうけれど、何分にも良い水が得られません、その間に年も大分たち、自分もだんく年をとりまして、身體も衰へて参りましたが、それでも漸くこの井戸を掘つて良い水が出るやうになりました、これを最期に親父は亡くなりましたが、親父が最期に掘つた井戸から良い水が出たといふので、この井戸の名は親父の名をそのまゝに『五左衛門井戸』と只今でも申して居ります。もはや四十年ばかりにもなりませうか、村方の者が打寄つて、この婆は井戸を掘つた五左衛門の子だといふので、扶持をくれて、この井戸の持主といふことにしてくれまして、その爲に安樂に暮して居ります。これはまことに父親の御蔭と存じます。今日殿様がこゝを御通りになつて、この井戸を御覽になるといふことでございましたから、井戸守でございしますので、私がこゝまで罷出でました、と申しました。——かういふことが書いてある。

この土地はどこであるかわかりませんが、いづれにも武藏野の中の話で、どの村方に於ても水が大切にされ、井戸が珍重された、といふことが知れます。さうして良い水を掘當るといふことは、それが公益の最大のものと思はれてゐたことがわかります。昔は水脈に掘當るといふことは、僥倖のやうに思つても居りました。掘りが深いからきつといふわけでもない。いゝ按配に良い水を掘當るといふことは、勿怪の幸といふことになつてゐた。さういふ風でありましたから、神佛から水をお授け下されたといふことや、名僧智識が杖の先で掘つたら水が出たといふ傳説があるのは、人間業ではないかの如く思はれてゐた證據だと思ひます。それ故に井戸の數も甚だ少く、良い水も無論少いわけでありますが、綱吉將軍の代になりましたは、だんく水道が殖えて、何々水道、何々水道と五つ位の名稱があるやうになつて参りましたけれども、その當時の江戸に致しましたところが、やはり水は乏しいので、元祿三年版の

『枝珊瑚珠』といふ笑話の本に、在所の親仁が江戸へ小僧に出した自分の子供を叱る言葉がある。お前はまことに花のお江戸へ参つて、湯の水風呂に入れる、己は何年にも湯を浴びたことは無いのに、お前は仕合だ、といふやうなことをいつてゐる。『近世事物考』を見ますと、風呂といへば海の水である、たまに鹽氣の無い水を汲んで使ふのを水風呂といふ、と書いてある。井戸水で風呂を立てるといふことは、大都會の江戸でなければ出来ないことだ、といふことがこの笑話でわかります。

浴場の尠い譯

尤も後々までも江戸には湯屋といふものが少うございました。武家屋敷などでも、組屋敷などになりますと、浴室は大抵無い。仲間内でもやつて、湯を立て、それに入る。めいゝに湯殿を持つてゐるなんていふことはありませんで

した。町家もよほどの大きな町人でありませんでは、湯殿を持つてゐるのは無かつた。寶曆以降になりましたは、場末の町々まで浴場があるやうになりましたが、寶曆以前はそんなわけに行かなかつた。これは全く鑿井の關係であります。それでも場所によつては、なか／＼湯に遠いところがいくらもあつたので、場末ばかりが湯に遠いわけではありませんでした。寶曆以降に場末の町々まで湯屋があるやうになりましたも、自分の家に浴室を持つてゐる者は甚だ稀なので、それは江戸が燃料が高いばかりの理由ではない。第一に専用の井戸を持つてゐなければ、湯が立てられなかつたからであります。

それには最も面白い話がありまして、埼玉縣入間郡、所澤から二里ばかり行つたところに三富村といふところがある。これは柳澤吉保が開拓した村で、元祿七年に著手して、九年には成就した村であります。この三富村は開拓される當時に、『芝行水』といふことが行はれてゐた。こゝには限りません。關八州の

平野といふものは、水の乏しいところですから、どこでもさうですが、この芝行水といふものゝ残つてゐたといふ證據のありますのは、私の知つてゐるのではこの三富村だけである。それはどんなことをするのかといふと、芝を刈つて来て日陰へ干して、それで身體から手足をすつかりこすつて、脂や汗を取つて、それで入浴の代りにしたのです。『枝珊瑚珠』の親仁が、『おれはなん年にも湯をあびたことはなけれど』といったのは、やはり芝行水であつたか、どうか知りませんが、さういふやうなことが行はれてゐたのを、合點させるものだと思ひます。

名水二十二井

享保版の『御伽百物語』を見ますと、桶町一丁目の南側に柳屋善八といふ者がありまして、その家に讓の井戸といふ井戸があつた。この井戸は水がいゝ爲

に、その水が賣れまして、柳屋は身代がよくなつた。この井戸は子孫に讓る柳屋の寶物だといふので、讓の井といつたのだ、と書いてあります。それに續いて江戸に名のある井戸が所々にあるといつて、その井戸を擧げてある。それには牛込の堀かね井、源介橋の油の井、神田の宮の小路町の井、四谷の策の井、須田町の龜の井、權田原の鱒の井、湯嶋の柳の井、谷中の野中の井、自性院の蜘蛛の井、小石川の極樂井、龜井戸の藤の井、玉水の井、御福の井、封の井、新の井等、すべて十八、名井があるといつて居ります。この十八といふのは數が足りません。讓の井とともに十六しか擧げてありませんが、江戸の十八井といふ名を、こゝに傳へてあります。同じ享保に出來た『江戸砂子』には、名井を二十二擧げてある。この『江戸砂子』に當て、『御伽百物語』の方を見ると、その所在もよくわかりますけれども、同名の井戸が多いから、紛れ易くもある。『續江戸砂子』以下にも、名井といふので井戸が擧げてありますが、享保度の名

井は『江戸砂子』に盡してあるやうに思ひます。

『江戸砂子』の二十二井といふのは、小路町の井、神田明神の内横小路にあり、西町といふ、北の奥に井戸がある、外に杉浦出雲守屋敷内にも呼び名の同じな井戸があります。野中の井、又の名を柏木の井といふ。三崎の内の町屋の裏にある。山伏の井、これは濱町の堀家の裏通にある。龜の井、連雀町の金田丹波守の屋敷にある。御水屋敷の井、立大工町、主水の井、白銀町の大久保主水の屋敷。柳の井、神田冬青の木酒井家。讓の井、桶町にあり、其處不詳、なのです。又古鹿子に日本橋より京橋をきつての名水で、夏になると一杯を一文に賣つた。それで金持になつて、子孫にその水を讓つたから『讓の井』といふともある。この頃の掘抜井戸はまことに少いもので、これだけである。この井戸は前の柳屋の井戸らしいですが、こゝではその所在がわからぬとなつてゐる。此『古鹿子』といふのは、元祿版の『江戸總鹿子』のことを申したのです。姫が井、又

の名を櫻が井ともいふ。山下御門と幸橋の間の土手際にある。封の井、これは櫻田内にあるが、その場所はわからない。同じ名の柳の井が又ありまして、これは三浦志摩守の屋敷、虎の門内、櫻が井、井伊家の表門の下にあつて、車の三つついた釣瓶で汲む。若草の井、同所の辻番の下、御堀の上のところにある。策の井、新宿の追分の西、松井源次郎中屋敷、是は津の守のことです。蜘蛛の井、瘤寺境内、瘤寺といふのは自性院のことです。また封の井といふのがある。青山因幡守の屋敷。玉の井、堀ノ内妙法寺の内。御福の井、淺草六角堂地藏の下にある。又櫻が井、これは淺草新寺町の東陽寺の内にある。堀兼の井、牛込逢坂下。眞間の井、眞間弘法寺の内。朝比奈の井、品川松平土佐守下屋敷、かういふ風に書いてある。これで見ますと、水を賣つたといふのは『讓の井』だけではありませんが、大分享保頃には井戸が殖えてゐる。これが皆鑿井ではありますまいが、とにかく井戸は殖えて居ります。良い水の出るので名高い井